柳川雜誌

主幹・麻生路郎

第八卷　第十一號　十一月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和六年十一月一日發行（毎月一回一日發行）第八卷　第十一號　柳川雜誌社發行

川柳雜誌第八卷第十一號目次

文苑

答の出し方　松丘町二(二)
柳の絮(八)　長野吉高(八)
女裝せる男性作家に與ふ　麻生葭乃(二六)
茸の香りを探りて　住田亂耽(二九)
川柳明無線電話(四)　秋農屋(三〇)
火華……(三七)
人參雜話追補　蛭子生(三八)
川柳日待及び月待(三)　藤里好古(四五)
月句の世界　紋太、ひろし、山雨樓、琴人、杏三(三)
地下鐵
馬毛神話　楊井二南(四)
ハートを外す　西田艸樂(六)
初心者からの言葉　荒田錬屋丁(六)
僻眼　H.G.DWELL(八)
指導原理　福田山雨樓(一〇)

一路集(募集句)
捨兒　阿部閑生選(四〇)

白狀
水谷鮎美
楊井二南共選(四三)

◇

本社句會　松丘町二記(四七)
續川柳家戸籍調　福田山雨樓(二六)
西之町MEMO　橋本綠雨(四〇)
編輯の窓　路郎生(六〇)
書の校正　山雨樓(六一)

創作

近作　麻生路郎(一)
第一線　麻生路郎選(四)
春秋點　同(二四)
川柳塔……(三四)
粒々集……(三六)
光耀抄　麻生葭乃選(三〇)
近作柳樽　松丘町二選(二六)
各地柳壇……(四七)
表紙「裸女」(自畫自刻)　天西長三郎
題字　麻生路郎

十一月例會

▼日時　十一月六日(金)後六時半
▼場所　南區清水町電停西入北側　端の坊
▼兼題　「幸福」　三句
▼會費　二十錢

初心者の來會を大いに歡迎す

年賀の廣告を募る

▽奪つて申込まれたし△

柳友交誼のため

▼一口　五拾錢

幾口でも申込んで下さい。一頁希望の方に限り金七圓。一口分原稿はなるべく簡單にお願ひします。

▽申込期限　十二月十日迄(新年號掲載)

大阪市住吉區平野西之町八三
川柳雜誌社
振替口座大阪七五〇五〇番

廣告申込はなるべく振替を御利用の上前金に願ひます(三錢以下の切手代用でも差支はありません。)

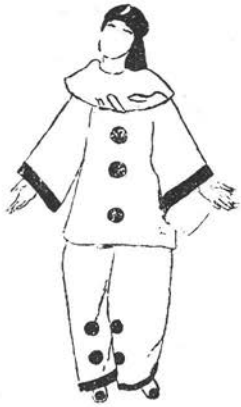
近作

麻生路郎

人妻のあまりに長き袂なる
戀をしてるのよこいひたい眼のあをさ
泣けて來るほどに戀しき君ならず
思ひあがつた女よ戀を棄て給へ
もう僕も長い食事の連續さ
電車賃たのむルンペン藝術家

大和飛鳥にて（四句）

あすか川これかこ思ふ川の幅
久方のその香具山の小さすぎ
溜息で見る香具山は曇つたり
二千年たゞ石人のほほえめる



答の出し方

松丘町　二

「科學から得る答、求め得られる答は只一つであるが詩、の與へる答は無數にある。科學と詩との相違がこゝにある」とは夏の動物園句會に於ける路郎先生の講演の一節であつた。科學もまた詩である、と科學者達は云ふかも知れないが、理屈はごんな物にでもつけることが出來るし、ある場合科學も亦詩であらう。だが私らの關心は詩にある。詩の答にある。詩は宿命的に無數の答を持つことの可能を許された。こゝにもろ〳〵の詩人が生れ、かず〳〵の答が勝手な名稱のもとに横行し、そして到る處で悲喜劇を演じ、詩なんか屁とも思はぬ冷酷な教養を持つた勤勉な一般の社會人は、盲扱ひにされ、詩や詩に就ての無數の文章が紙魚の糧として、うんざりする程、印刷工業の支配下に生産される。それはそれとして私は今、川柳について、その「答」の問題を眺めてみやうと思ふのである。

我々は川柳詩人として、その第一歩を柳樽の古句の上に置いた。古川柳といふ答を前にして、考へた。考へた結果は、我々にとつて大切なことは「出來上つた答」であるか「答の出し方」であるかといふことであつた。だが「出來上つた答」である古川柳を唯一無二の規範として、古川柳みたいな新川柳を作つてきた多くの作家達は、寶暦明和そして安永天明の頃と、昭和の今日との時代の流れなどは、凡そ考へやうとはしなかつた。一方川柳が詩と呼ばれることの如何は「答の出し方」にある。作句態度にある。といふことを悟つた人々にとつては、新しい川柳の沃野が、洋々として拓かれたのであつた。

酒がいつしか水になつてる　　路郎

妻よ子よばら〳〵になれば淨土なり　　同

我々はこれらの句の表現手法のユニークさに驚く前に、かういふ「答の出し方」即ち作句態度は「出來上つた答」ばかり氣にしてゐる常識作家から、いかに遙かに飛離れて仕舞つてゐるか、そしてこれらの句は「答の出し方」について、如何に確固たる藝術信念の把握に原因してゐるか、といふことを知らなけ

ればならない。

三人が醉へば三人らしくなり　路郎
書寢から海岸線がのびてゆく　同
文學を輕んじ馬で裾野行く　同
青春を摑みぞこねた金遣ひ　同
自分の好きな心配を持つ若き日よ　同
候補者よ一體何處に住んでゐる　同

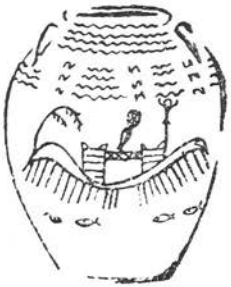
これらの句から敎へられるところのものは、色々あるであらうが、すぐれた洞見を持つた鑑賞者は、その一つとして、これらの句が次のやうな主張を持つてゐることを感得するであらう。それは「創作に當つて作家は、發展性のない安全地帶で呼吸してはいけない」といふことである。こゝにいふ發展性とは、詩の「答の出し方」に對する眞劍な熱情的な思索を指してゐる。

由來總ての藝術のうちで、冒險性を少しも持つてゐないといふことは、最も安全なことである。しかしその安全さは、いつも氣安くはあつても、住みごゝちがよかつても、發展性がない革命的精神を失つた藝術——それはヴイタミンを失つた干物である。川柳に於ても、すぐれた作家のすぐれた作品には、ごの斷層にも、安全地帶での呼吸を恐れる精神が存在してゐる筈だ「答の出し方」について、作者の精神と意圖とをかう語るこれらの句は、更にその表現形式に於て、次の如く語つてゐることを人々は知るであらう。

「古川柳の表現形式を敢て否定はしない。しかしそれは昨日の問題として肯定してゐるに過ぎないのだ」と。

さて安全地帶に立籠る人々は云ふであらう。他の詩は知らず川柳はあくまで民衆詩であつて、冒險性や新への動向は邪道であり、本格ではない。老幼男女如何なる階級にもよく理解され面白がられるのが、川柳の本質であるのだ、川柳の味方は民衆である。と、よろしい。では手近にあるルコックの言葉でお答へしやう。「少數の指導階級が民衆の先にたつて先導するから社會も進歩し、藝術も精巧になり、趣味も向上する。然るに指導者が自ら身をおとして狂奔するに至つては、永劫に藝術の進歩は望まれぬ。元來民衆には藝術に關して新を厭ふ習癖があるそしてこの厭新病があるために、彼等民衆は、いつもその進歩を妨げられる。してみると民衆は實に藝術進歩の敵である。何故ならば進歩は常に現狀に飽きたらず、これを離脫し、これを破壞することから始まるのである」

川柳にとつて、この言葉が絕對的であるか否かは議論の餘地があるかも知れぬが、一面の眞理を語つてゐることは疑ふ餘地がない。だが我々は徒らに奇を好み、冒險を敢てをかすことを以て足れりとするものではない。只「答の出し方」についての認識、云はゞ我々の作家的覺悟について語つたのであつて、如何に安全地帶を蹴つて飛び出さうとも、川柳も亦正しく經驗的習練により獲得され生長する技術である以上、作家的情熱を孕む素材も、それが詩となるまでには、幾度かの濾過を經なければならないことは云ふまでもない。



第一線

路郎選

ハーンドン バングボーンの緊張よ　山雨樓
日輪草倒けた姿が支那に似る　同
小使じみて水洟をかみ　同
百姓の腰の強さが稻を刈る　同
一錢を子供は握るものにする　同
秋の灯を乘せてレコードハイフエッツ　町二
噓して妻の笑ひの處女に似る　同
秋は人を食器の如く愛撫する　同
直線を集めて白し秋の風　同
葡萄の一房を妻ちよきんときりぬ　亂耿

馬毛神話

楊井二南

こんな話を聞いたことがありますか。在鄕軍人の奉公袋の中に馬の毛が二本這入つてゐると云ふのです。實に神秘的な事實ではありませんか。筋向ひの家では此の天與の微毛を崇敬すること あら〜かしこく叮嚀に白紙に包んで神棚に捧戴し奉り 朝夕之を拜して疑はず、近隣之を聞き傳へて門前市をなすと云ふ始末。向ひの內儀が朝つぱらから飛び込んで來たかと思ふと主人の 奉公袋にもこれこの通りですと 吹けば飛ぶにきまつてゐる纖維が二本。隣りの若衆が簡閲點呼から歸つての話には有難い御神託を受けた者が多數あつたと云ひます。戰爭があると云ふのです。天災が起るのです。聞き捨てならぬ流言であります。併し何人も此の不可思議な

表情の自由を奪ひとつた金　同
艮の端もつ獸人の鼻の尖　同

まるれえれ・でいとりつひ　に捧ぐ（二句）

廣き額に面影はたゞひとつ　愚陀
秋の女灰となりゆく煙草すふ　同
乳房と風船と秋の空との感傷さ　同

日支交戰（三句）

裝甲車威壓に一つ打つて見る　柳路
日章旗に祖國を偲ぶ旅に居る　同
月光を浴びて淋しい占領地　同
子の方が先に醉うてる宿の酒　雅幽

善光寺

善光寺これぞ此の世の親子連れ　同
陽明門父の眼鏡に照り返へす　同
借金を思へば豆の煮えつまる　新水
あとさきを考えてればオヽ寒や　同
血をわけた子とも言へぬが合ひに來る　綠雨

纖毛の存在を實見するに及んでは、無暗に否定出來なくなつて了ふのです。何れにしても尋常ならざる怪事件であります。が併し在鄕軍人の一人であり且立派に奉公袋の所有者である筈の私としたことが不幸にもその御神託にあやかつてゐないのです。袋の隅々まで檢微鏡的搜査をしたり裏返してはたいても見たのですが馬の毛と云ふ樣なものは一本は愚か半本も發見出來ません。ひよつとしたら八月の點呼の時にうつかりしてゐて落して了つたのかも知れませんね。だとすると私は大變な損をしたことになります。何故つてこんな素晴らしい寶物が而も一九三一年に發生してゐるんですもの。

次にこんなことを知つてゐますか。奉公袋の口には總べて麻紐がついてゐると云ふのです。これは又何と素的な手品の種ぢやありませんか。日本人の宣傳上手は決して支那人には劣つてはゐませんよ。大膽にも今時こんな神話をでつち上げる機智は他の能く倣ふ可からざる所ですね。

其の後筋向ひの家では神棚の紙包をどう始末したのか知りません。或はまだ堅く信じて此の神聖なる麻紐の斷片に額いてゐるかも知れないのです。無理もないのです。それ

善惡がわからぬ女もてあまし　同
賣る本をかゝえて踏切を越えぬ　杏三
夜露に濡れる戀の果無し　鐵洲

○

淨玻璃に映らむ姿想ふ齡　濁水
日永さへリズムを刻むきり〴〵す　同
ウアー、ウアー遠足の汽車景を行く　同
釣支度二日當日たゞ歸り　同
嫁いでも嫁いでもまた祟る酒　同

生活斷片

勝敗は知らず寢床が待つてゐた　民郎
稀れに見る男ゞされて恙なし　同

W恩師に献ぐ

自らを疎んじ切れず絶つ酒ぞ　同

同志と田川畔に遊ぶ

猥談を見くびりもせず飯仕度　同
稻の香へうつかり子供忘れてた　靈壺

から間もなく本當に戰爭になつたちやありませんか。そしてこれが本當の「果せる哉」と云ふやつですかれ。

ハートを外す

西田艸樂

雨の日でした。電車の中央の入口の際に乘つて居ますと、或る停留所から妙齡の婦人が蛇の目傘を閉めながらあはたゞしく乘込んで來ました。

傘を中青眼に構へたまゝ、体をくるりと私の方向に向き直つた。電車がヅイと動き始める。黑塗の高下駄がよろ〳〵と後へしきつたと見るや、其反動を食つて、又前へ二三歩つんのめつて、青眼に構へた蛇の目傘の切先が私の胸を突かんとする。パツと体をかはさうにも左に人が居る。右に手摺がある。

エ、まゝよ、思ひしな、突いて見さすもと……度胸を極めるとやつと、足が極まつた婦人は只輕く輕く私の胸を觸つたに過ぎませんでした。而も完全にハートを外れました。

初心者からの言葉

荒田練屋丁

「初心者向きの雜誌」さうした旗印の元に澤山な柳誌が出てゐる。

造つてはだめだ、生まればいけない眞似て

聖堂にしみ〴〵秋の人となり　同

晩夏

撒水車たまに走つてみたりする　同

山田順子へ

醒めよとて順子へ煽るジャズじやなし　同

墓場までもつて行つたといふ秘密　閑生

ねずみの子の産毛に觸れてみんか　同

名月の人寢ねてより缺けそむる　同

さつま薯食うて罵る金本位　同

みにくさに女子大學を出てしまひ　明珠

言ひ譯けの雨がざあ〴〵降つてくれ　同

汽車賃のいらない人が燕號　同

少し儲けて氣短かになる　同

おぢいさんのとしに二人はびつくりし　裸人

はづかしい病氣支店の方で病み　同

氣が合うて裏からおかずやりにゆき　同

肋骨の數へるまでもなくあらは　綠之助

はいけない。理屈つぽい。説明すぎる。技巧がない。新らしい境地。奇拔な見付けなと云はれてゐる。なんと川柳とは六ヶ敷ものかなと僕は思ふ。理屈、説明新らしい境地、見付、表現、それがわかるくらいなら何も心配は要らない。製造の出來ない樣なものがどうして創作が出來よう。この呵責に惱む初心者は二三年續いたあの愉快な作句熱もいつのまにか覺めてしまふ。僕に云はすれば先導者が延びてくる若芽若芽を、むづかしい理屈を浴せて葬むつてしまふのではなからうかと。

燒直しもよからう、類句もよからう、平凡またよしである。どん〴〵句にすることだ。燃へる樣な作句熱をどん〴〵高めることだ。なんらの拘泥もなく十七字にまとめることだ一日に二十句、三十句、そうしてどし〴〵先輩の批評を乞ひ句會に出席することだ。

それが句境を廣くすることになり、新らしい表現も、新らしい見付けも、そこから生れてくることになるのではなからうか。

初心者向の柳誌は先輩者の智慧くらべの道場であつて所謂先輩者から見た初心者への言葉である。初心者から見た初心者への言葉！それが如何に初心者に對して、興奮劑となることよ。

僞はらざる体驗、惱み、等々の初心者欄が今の柳誌にほしいと思ふ。

食ふすべもあるなり今日は藥賣り　同
こゝの川に今年は髯のある案山子　同

二歳の愛人へ

おゝだいてあげようけれど肺ですの　晃卓
金の音耳がするごくなりにけり　同
にらみころしてやりたいりんき　同
おごけたる鼻よいつまでひよこつくぞ　丹路
戀を戀ふ若きこゝろは持ち合はし　同
死んだふりして蜘蛛よ淋しがらすな　桂枝
米代も拂はずラヂオ鳴らし立て　同
仁術か知らぬが餘つ程高過ぎる　同
採算が取れず喧嘩に酒を買ひ　水華
子を負うてお寺參りの日が暮れる　同
葉卷を銜へて社員の目を逃れ　同
新しい女中の足が白く見え　二南
平等が怖い男の家が建ち　同
支那通を圍めば不利を云ふばかり　岬樂
朝日一本五百圓をばのべにする

僻眼

H.G.DWELL

——柳界のスフインクス！そんなものが無くて幸であり又不幸でもある。——

×

君が持つ言葉の無限の蔭翳のほんの一部でも十七音字の中に顔を見せてゐるならば、君は幸福だと言ひ得られる。

×

同じことを繰返し〳〵言はねばならぬ苦痛は教師の不幸である、と。啻にそれが教師のみの不幸であつて呉れゝば好いが。

×

新しき香に醉ふ前に、新しきものが如何によつて産卵せられ、發生し來つたかを考察する要は充分にある。

×

風船が孕まされたあの時の美しさ、輕快さ！然しその中の空氣が排除された時の萎び切つた、皺寄つた無態さ！又は孕らみ過ぎて破裂した時の悲鳴とその後の空漠！こんな川柳が……それ以上の淋しさに堪え得られない。

×

新しい角度と云ふのは決してものを裏から見るものでもなく、斜に見るものでもないたゞ潑溂たる詩的精神を言つたまでゝある。

×

折角の食堂離れて掛けさゝれ　同
思ひきりほたえてゐるも母の留守　夕鐘
赤すぎる夜着パトロンの好みなり　同
死線から鳥が泣いてるのに氣づき　観月
弱點へ女は肩にもたれたり　同
母娘して途方にくれる口入屋　一杉
釣舟に時をきかれる片男波　同
レビュウこは色こ人數であるを知り　春秋
絽刺しの手白し祇園の晝の閑　同
頼んでおいた車ゴロ〳〵來るらしい　計加
寺訪へば蚊帳で和尚は讀んでゐる　同
夢に見た淨土も矢張り金がゐる　翠夢
政論に天下をこつたルンペン氏　同
仕事着のまゝで封切る國のふみ　秋月
安らかに父は死んだに此の騒ぎ　同
母の眼にまばゆき光り阿彌陀さま　鮎美

入院久しくして

街の夢みてりや枕のおちてゐる　奈緒美

今迄に使はれた言葉を使はずに語り出だすと云ふことが、どんなに苦しい陣痛の慘苦を必要とすることか。言葉の嘘がどこまで私達に祟つてゐるか。内からなさるべき肉附を忘れられた言葉の羅列が如何に醜い態を示してゐるか、十七音字の不幸は此處に胚胎してゐる。

×

人間の不幸は言葉を與へられて以來始つた。言葉は言葉を産み、言葉のもつ不正確は次の言葉の不正確さを倍にしてゐつた。十七音字の中にその言葉を閉ぢ込めると云ふことはたやすくして恐しいと云ふことを悟らなければならない。

×

同じ一つの色が陽の中に置かれた時と蔭の中に置かれた時とどれ程異つてゐるかは言ふ迄もない事だ。がそれが言葉である時には衆愚は餘りにも無關心であり過ぎる。

×

ジャズ、あのいらだゝしい音調、うら悲しい悲鳴。ジャズが變調の音樂であることは言ふまでもない。そしてキングオブジャズのホワイトマンは「ジャズは現代アメリカの空疎な切ない心の表現である」と言つた。

破調の句、それは十七音のノーマルに對してアブノーマルであることは間違ひない、そしてそれが「空疎なる切ない心の表現」であつたなら、何が「空疎なる切ない心」にしたかを探索すべきである。

心から詫びて居るのへかたくなゝ　紅
圓陣を引いて名月待たれたり　奇可愛
女女そんなに塗つてごこへゆく　變人
親もねて子もねて今日の月をほめ　雪峰

従兄の不幸へ

よその兒の聲にも乳房おさへて見　水車

◇

燈明が搖れたら母と思つてる　翠峯
よう云ふも云はんも振られ通しなり　同
仕事着で正しいことを子に教へ　同
饅頭の味此町へ落付く氣　勝二
ラッシュアワーやはり女に眼をなげる　同
借物のやうに畫居る若主人　同
妻の意見で飛行機に乘るをよす　湖山

父の死

鍵の音させて隱亡先きに行く　同
八燭の灯を下げさせて醫師すわり　志郎
お惚氣の聲は團扇で散らされる　同

指導原理

福田山雨樓

先日ある所である新聞記者――といつても某大新聞社に重きをなしてゐる堂々たる〇〇〇先生である――から滿洲問題に就ての講演を聞いた。その人は言ふ。「新聞つてものは近代人の糧食ではあるが又商品でもある。社會の木鐸だなんて威張つた顏もするが實のところ一箇の擴聲機の役目に過ぎない。指導原理なんてものはこれつぱかしも持つてゐるものではない。で記者としての私の話も勿論その輪廓を出ない。」とて、口を極めて新聞の透明な立場を述べられた上、得意な時局問題の論攻に這入つたが、なか〳〵ごうしてジュネーバの十三對一なんかになつて來ると、血を湧かせずには置かない。指導原理といふ冷たいものでこそなけれ、語るも聽くも同じ血潮の波を打ち寄せてゐた。

そこで思つた。川柳に付て、指導原理といふ嚴かめしい、こて〳〵の盛裝めいたものはあつてもなくてもいゝのだ。あることを却つて妨げる場合がある。それよりもお互ひが血を湧かせばよいのだ。血を湧かす理屈でなく、血を湧かす方法でもなく、血が湧く箇と箇であればよい。と

川柳と云ふ病氣に罹つたやうな今日此頃、もう無條件で血が湧く。句は作られねばならぬいゝ句を殘されねばならぬ。柳友を迎へねばならぬいゝ柳友を離してはならぬ。雜誌を出さねばならぬ、いゝ雜誌を贈られねばならぬ。と

戰死した型で工場は休みなり　如空
うす馬鹿に見えて夫婦の仲がよし　同
隱居さす話に父は耳かさず　沒食子
難のない嫁に子供の出來ぬ愚痴　同
添ふ程でない戀嘘がまたばれる　柳兒
立退きの强身は家賃滯り　同
病氣にはかてず此の頃神だのみ　方眠
退職金今日も朝からのんでゐる　同
心太子の掌母の掌逃げ廻り　虛白
ルンペンの晴も秋の姿なり　同
顏役の葬式見てる紺ぱつち　素萠
親分と小遣取がおだて上げ　同
院長も酒の祟りの痔に惱み　丁路
嘘々で俳優情史固められ　同
目醒むれば子は十歳に八歳に　光哉
世辭云へぬ人で通つてあてにされ　耕民
ころり死ぬことを希うて有難や　不然
爭議から脫退しろと父は言ひ　卯三

全く不動明王のやうな意氣と熱に燃えてゐる自分である。僕に並んだ𝑥も亦僕と同じやうに燃えてゐて呉れることを希ふ。そして𝑥と僕と、僕とAと、BとCとが相共に血を湧かし合つて、川柳と云ふ尊い兄弟商會の礎と看板とをずん〳〵大きく强にものにすることを生命を賭して祈りたい。みんな祈る心になつて手を握り合ひたい。

朝カンテキをいこす時に、新聞紙と消炭とそして團扇とを使つてゐるが、さてマッチがなくては何ともならぬ。マッチも濕つてゐてはどもならぬ。火だ、火だ、火を發する熱だ。あの白い細い一本の軸を持つ毎にこれを思ふ。そして川柳を思ふ。

兎に角熱がなくては川柳は進むものでもなく、展びるものでもないと斷言する。しかもその熱は三十六、七度の熱がいゝのだ。これは實に人類に與へられた生命のるつぼであある如く、活動の原動である。

指導原理は身体の熱を守る着物位の役目するかも知れない。時には羽織のやうなのもあるが。われ〳〵は身を飾る衣服にも無關心でゐられぬこともあるが、熱が冷めたり上り過ぎるやうなことがあつては甚だ心配だ。平熱の川柳が即ち何よりの指導原理である。

觀菊川柳會

日時　十一月十五日午後一時より
場所　明石公園貴賓館
兼題　「瓦」三句
會費　金五拾錢（夕食共）
主催　明石蛸壺川柳社

月評 句の世界

紋太　素琴　ひろし　山雨楼人　杏三人

春秋點

素人提出

殊勝氣に坐り位牌の字から讀み

素生

素人——さて……まあ出した丈けにしておこ。

紋太——簡單にいきませう。

琴人——一寸も同情のない……

素人——勿論同情のないことを 厭だのだらう。

琴人——空々しい態度の人が 其處に浮んで見える。皮肉な見方の句だ。辛辣な。

ひろし——其れ丈のことは句を讀めば 解るが其の奥に 何かあるのではないかね——これでは文字通り 緣もゆかりもない佛を見て居るやうではないか。

琴人——作者の立場から云へば 自分が悲しみの絶頂にあるにも拘らず 空々しく殊勝氣を裝つて居ると云ふ事が 餘りに自分の淋しさを越えた淋しさを 感じて居るのであらうと思ふ。

ひろし——其處に此の句が 表現を盡して居るだらうか。兎に角「佛壇の前に坐つた處は殊勝氣には見えるが さて拜むのでもなく何をするかと見ると 位牌の字を讀んで居る」と云ふ丈しか解らない。

紋太——餘り愉快な見方でないから 讀んでも讀だ以上に心が殘らない。少し皮肉が勝ち過ぎて居ます。こんな時は「殊勝氣に」等と云はないでそう云つた人物の名稱を 用いた方が同じ皮肉でも愉快にうけとれると思ふ。

ひろし——技巧が足らぬ譯ですな——

琴人——輕い氣持で云ひ放つた丈のものではあるまいか。

素人——句の構成法からいけば 紋太さんの云はれた通りであるが 近頃私がこう云つたやうな經驗があるので——其の場所の 零圍氣が何だか平氣な顏をして居る 譯にゆかないので心にもなく 佛壇の前に坐つた——と云ふやうな——そんな意味から 此の句を提出したのであつて諸君の御說の如く 或る皮肉味はあるが深刻な句では 素よりありません。

ひろし——句は深刻でない かも知れないが句を作つた動起は或は深刻な 場面であつたのではないかと思ふ。例へば母親が死んでその母親に虐め拔かれて 夫と共に家を遠く離れて居た嫂が葬式も濟んだ 後へ戻つて來た時とか。複雜な事情を 察まうとしたものであればそれは出て居ない。併しそんな事を考へて居ないのであらうから結局 これ丈の味のない皮肉だなア—位な句に なつたのであつたのかも知れぬ。

紋太——「殊勝氣に坐り位牌の文字を讀む」とすれば少し嫌な感じがへると思ふ。

光耀抄

ひろし提出

親しみを金齒に見せたタイピスト

スエノ

ひろし——青春を思はす明るい句である。金齒が非常に可愛ゆくよく利いて居る。中々愛嬌のある朗かな 近代職業婦人美を出して居る。

紋太——金歯を入れた人が 何彼につけてにつこりして見せるのを皮肉つた句は よく今迄にあつたが此の句は 少しもありふれたと云ふ感じはなくて 今目の前にそのタイピストがこちらを見て居るやうな 思ひをさせる力を持つて居る。

琴人——兩氏のお説に共鳴して 私は云ふ事なし。

素人——親しみと明るさと 健康をまざ〳〵感じる佳句であります。

杏三——如何にもおつとりとした 明るいタイピストを畫き出して居ると共に 其の背後にある作者の明るさが 克く出て居ると思ひます。

紋太——感情を直接に述べる事は 何方らかと云へば句が拙くなる場合が多いと思ふが、そんな時に悲しいとか憎いとか云ふ 意味より親しみと云ふやうな 溫みのある意味を使つた時の句は其儘うけいれる 事が出來て効果が多い。

素人——蛇足ですが假に「親しみを」を「可愛さを」とでもしたならば駄目ですれ——

第一線　紋太提出

障子張り張り轉宅がしたし

明珠

紋太——じつと味はつて見ると 儘ならぬ世の中と云つたやうな事を思はせられて來る。こんな思ひ方は少し考へ落ちの やうでいけないでせうが 此の句の男盛りの人間を思はせるしつかりとした處を好みます。

ひろし——莢豆君の句に「青葉ゆさ〳〵琴平詣りがしたし」と云ふ句がある。語呂が此の句とよく似て居る。併し內容は全々違がふ。調子が餘りにも克く似て居るのに 內容が餘りに異つて居る事も面白いと思ふ。處が僕が最初此の句を咏んだ時には 莢豆君の句の潛在意識からか非常に明るいものを感じた。小春日和の日向で障子を張り替へる いゝ氣持ち。そうして其處で夢幻的に小じんまりとした家を想像し そうして其處に轉宅したいと云ふ慾望を持つ思ひを感じさせられた。然るに此の句の詠まんとした處は さんの折れた破れ障子である そうして現在住んで居る處は牢巷のやうに思はれる。僕の感じが正しいとすれば句意と異つた句が 其處に表はれて來はしないかと思ふ。

琴人——この句が私の作つたものだとすれば實感句だと云ひたい。今ひろし氏が莢豆氏の句の潛在意識から明るいと 感じたと云ふ事であるが 私は黑い障子の骨を直ちに感じた。自分が同じ家に八年間住んで居て丁度この頃毎年障子を張り替へる その度にこうした句が頭の中に浮ぶが 私の纒め得ない內に明珠氏がはつきりと詠まれて居る。

素人——莢豆君の「青葉ゆさ〳〵琴平詣りがしたし」の句からはひろし君の云つたやうに明るい味を感じると同時に深い惱みを うけとることが出來るけれども此の句「障子張り張り轉宅がしたし」からはひろし君の說のやうな明るみを感じない。障子が破れて張替へなければならない やうになつて居たのではあるが何れ凉風の立つ迄には引越す 積りでうつちやつてあつたのが 此の冬も又引越が出來ず障子の張替をしなければならぬ と云つた或る莢豆君の句とは別な惱みを感じます。

ひろし——「障子張り張り」と云ふ表現は如何にも いそ〳〵とその境遇が何うあらうとも其れに安住して居る氣持である。だから假令その障子が破れ障子だとか、黑い骨であらうともそれには關係無く 障子を張る氣持其のものを「張り張り」と云つたのは 僕には明るく感じられるのである。本當に新らしく張替へた障子と云ふものは すゝけた家の中をも華かにし見なれた 女房さえもその日は美しく見せるものである。

杏三——障子を張ると云ふ事は、少くとも張つた後は氣持の上に非常に 明るさを感じさせられるものである。然るに作者は一方でこの明るさを喜びつゝも 其の反面で引越がしたいと考へて居る 總ての行爲に純一になり切れず心の中では現在とつて居る行ひと 全然反對の事を考へて居る 多くの近代人の惱みを作者は「障子張り」に具象化して詠んだものであると思ふ。

琴人——明るい、暗いと云ふ論爭が生じたと云ふ原因はこの句が 二段切れの對照句である處によるのであらう。

（この時山雨樓出席）

川柳塔

琴人提出

憂鬱の日もあつてよし許嫁

二南

紋太——許嫁の句はよくあるから餘程よくないとあきませんね——この句は何うですかね——

素人——無論女から云つた句でせうね——

ひろし——そうではないでせう。

素人——何うも女らしいですな——

ひろし——憂鬱なのが女なのでせうネ——

素人——ソヤ、ソヤ。

琴人——青春の喜びに滿たされた毎日の生活、その樂しみの中にある日の彼の女の憂鬱な顏、それは男に採つて又新らしい興味を感じる。其處に若さと云ふか強い熾烈な情熱があるからである。そうした自分等の境地を詠つて居る事は はつきりと此の句からうけ容れる事が出來る「箕面夕景」と云ふ四句を見ても現在の作者の境遇が はつきりと知る事が出來ます。

素人——「自分のすきな心配を持つ若き日よ」ですな——。で憂鬱な一つの享樂でせう。

ひろし——二南君は今は婚約の うま酒に醉ふて居る事はたんまり味はされて 大いにあてられる。併し之れ等の句に何うも浮つ調子でしつかり大地を踏まいて居ない 甘さが出すぎて居る。

琴人——それはひろし氏が 少々ばかりやいて居るのであらう。

紋太——「憂鬱な」の方が正しいと思ひます

琴人——そうした意味でせう。

素人——併し「の」でもよいでせう。

紋太——此の句は何うも 叙法がドガチヤガして居ます。「憂鬱の日もあれよかし許嫁」「憂鬱な日もあつてよし許嫁」とすれば、整ひますがね—— 整ふと云ふ事は嫌なものですが。

素人、琴人——成程——

山雨樓——僕はね—二南君の心境を 詠んだ句であらうと思ひます。婚約と云ふ樂しさにひたつて居る中にも 憂鬱を感ずる日に出合ふ事は又一つの刺戟であり、心の波立ちである。つまり云へば平凡な甘さにひたり切れない心持ちを詠んで居るのではなからうか。

紋太——此の句の儘では 當事者の句だとは思はれませんね——

山雨樓提出

令孃の眼にはきたない鼻の汗

丹路

山雨樓——美しいものと、醜いものとを持つてきて、ある女姓の心理を捉へてゐるのは面白いと思ふ。

杏三——所謂川柳的 技巧を弄したつまらない句であると思ふ。

ひろし——技巧といふほどの ものさへも持つてゐない。働くものと、働かないものとの比較である。もつとも作者の意圖は 勞働の神聖、汗の貴さ、 さうしたものを誇らうとしたのであらう。併し近代的の感覺に生きるであらう所の令孃は、おそらく美しくもない眞黑な汗などは、見向きもしないであらうからこれは作者の頭の中でこしらへた ものだと思ふ。

素人——觀察も平凡ですな。無論机上の句でせう。

山雨樓——僕はさう簡單には思はない。といふのは、鼻の汗といふことは單に勞働の貴さといふやうなものを概念的に さしてあるのではなくて、若い男の熱情を象徴したものが感じられる。意圖といふやうな意味からすれば、作者の女姓觀といふことにもならうが、決して作り上げた句ではないと思つてゐる。

紋太——この句を讀むと、社長の令孃の前に立つてゐる若い社員が、令孃に對して固くなつて敬意を表してゐる姿が想像される。それにしても、令孃といふ言葉より、その意味を

もつと强調させる違つた言ひ方をした方が、よかつたであらうと思ふ。この句には確かに眞を穿つたことを認めるが、スエノ氏の句の時にも言つたやうに、きたないといふ觀方がきれいといふ方の觀方であつたら、もつと快感を與へるだらうと思ふ。きたないといひ、臭といひ、汗といひ、餘り愉快ではない。

ひろし——さうした觀方にみるならば、きたない鼻の汗をみすぼらしい姿に 現すべきではなかつたか。きたないとあるために、さうした社長の令孃の前に出た青年社員を 思ふことが出來難い。

紋太——きたないとふので令孃の 嬌慢な氣持がよく出てゐるのである 僕のさきに云つた言葉は、實際は人生觀をかへよ、といふ意味になるのだから、作者を冒瀆してゐるかも知れぬ。

琴人——さきほどこの句は、作者の女性觀だけではない、といふお説がありましたが、この句にはそれ以上のものが 受取り難いやうに思はれます。紋太氏の若い社員、それからひろし氏の勞働者、いづれにしても、令孃の眼にうつつた「きたない鼻の汗」だけでしかないやうに、この句の構成法では感ぜられると思ひます。

素人——この句は紋太さんの言はれた中に、令孃の嬌慢がよく出てゐると言はれたが、作者もそこを覗つて作つたので あらうと思ひます。その對照が必ずしも鼻の汗でなくてもいゝわけです。鼻の汗はある階級の女の態度を歌ふための材料に過ぎないでせう。所謂動く句でありまして、机上の句だといふのはこの意味です。

山雨樓——僕は下五は勿論 若い男のそれだと思つた。この句から快感を求めるとかいふことは、無理な註文であつて、或はその鼻の汗は、作者自身であつたかもわからない。がそれを通じて作者の女性に對する ある觀方が語られてゐはしまいか。句を通じて作者を感ずるところにこそ、この句の價値があるのではないかと思ふ。

ひろし——作者の女性に對する ある觀方は無論語られてゐます。どういふ觀方をしてゐるかといふ點について、鼻の汗を詩らうとする氣持だといふのである。つまり令孃の嬌慢ぶりを排擊する意識だといふのである。

山雨樓——僕の考をも一つ 卒直にいふならば、鼻の汗なんかきたないと、一概に形の上に表れたものから、輕卒にきめてかゝるといつたやうな淺い觀方があきたらない といふ點である。

紋太——それから僕が きたない句やいやらしい句を排斥するやうにとられては困るが、それならそれで切實に 迫るものがあればよいので、この句のやうに「眼には」といふやうな半ばたとへにひいたやうな まゐるさがある場合は、快感を與へぬ句はいけない、といひたくなる。

山雨樓——それではまゐるい表現が、快感でない對照になるやうだが「眼には」はたとへに取つたやうなまゐるさではなくて、眼によつて令孃の心持をとらへた 表現であらうと思ふ。

紋太——眼のことではなくて「眼には」の「は」の字をいふのであります。

杏三——この句について諸氏が これほどまでに述べられた熱情に驚きます。つまり敢て非禮ながら卒直な言葉を許されるならば、いさゝか評者自身の力負けとでも 申すべきではなからうかと、思はれますが……

山雨樓——力負けとは、句の方が負けてゐるのですか。

杏三——評者の獨り角力の意味です。

（十月十日夜於黒十九居杏三町二筆記）

× × × × × ×

女裝せる男性作家に與ふ

麻生葭乃

十一月號の光耀抄には妙子さん、絹江さんといふ新人を得ましたが、句を通しての此人達はどうしても女性でない事を悲しみます。女の浸潤をのみ許す畑の句は皆失敗に終つてゐました。たまに成功したのがありましても、それは客觀的のものばかりでした。假に子供を詠んだ句にしましても

大學もやつてやるぞと子を育て　妙子

蟬々をせがまれていゝお父さん　同

の如き父としての句が多く、其中、先づ中庸を行くものと思はれる

子を連れて子にも食ますせいろ蕎麥　妙子

の句にしましても、何處かお父さんくさい匂ひがします。ちよつと、散歩に出駈けたついでに寄つた蕎麥屋で、興味半分に蕎麥を食べさせたり、其實子供におつきあひをさせたのかも知れませんが、兎に角、せいろ蕎麥といふものを試食させて見て、父としての愛着を感じてゐるとしか受取れません。母の句としては、もうひと情味のたらぬ恨みがあります。世の中には思想が男性の傾きある女性はざらにありますが、さういふ人達でも、若し眞面目に自分の境地を狙つてゐられますならば、男が女の畑をあさつたやうな句は生れない筈です。光耀抄へショックを與へるための御投句ならば御遠慮を

續川柳家の戸籍調

○　係山雨樓

(一)姓名(二)雅號及別號(三)出生地(四)現住所(五)生年月日(六)職業又は勤務先(七)好きな句(八)自信の句(九)川柳以外の趣味(一〇)配偶者及子供の有無(一一)きらひなもの(一二)川柳に手を染めた年月

(277)　三輪夏曉

(一)三輪弐男(二)夏曉(三)東京市深川區東元町一八(四)住吉區王子町一ノ二七(五)明治三八年七月二五日(六)難波鐵道案内所(七)澤山有りますので(八)此の雪に職を拾ひし人もある(九)見るものなら何でも好きです(一〇)只今嚴選中です隨つて子供は御座ゐません(一一)モダンガエロと稱する近代女性(一二)五年程前からです。

(278)　長崎芽十

(一)長崎輝喜(二)芽十、庵號朱船堂(三)高知(四)大阪市北區善源寺町六ノ七〇(五)明治四十一年七月十五日(六)官吏(七)賣られたは三味線に手の屆く頃、水府。馬鹿な子はやれずかしこい子はやれず、

願ひます。私達は女性の畑を開拓し、男の方々が夢想だもせられない産物を培ふべくお互に腕に磨きをかけてゐるのです振はなくとも、或は光らなくとも、私達は不毛の地へ送られた最初のパイオニアであることをお忘れ下さいますな。

二十年近くも川柳に親しんでゐて、女の句と男の句の見境のつかない筈はないのです。

いかに内容が牡丹の如く濃艶でも、コスモスの如く繊弱でも、男の句には樫の木のやうながつしりさがあります。バケツの水をぶちまけたやうな荒つぽさがあります。女性の心情はささやかな溪流となつて流れてゐます。それと音律を合はせて下さいますならば、老杉颯爽としてざわめく風の響でなければハーモニーがこれません。せつかくの二部合奏が臺無しになつて終ひます。女性の心臓の血のほとばしりであるせゝらぎの聲と同じ歩調を取つて歩まれますならば、それは似ても似つかぬいか物が出來上りはいたしませぬか。

美しい夕燒よ子は病んでゐる　妙子

これなどは女性の持つ安價なセンチメンタルを借用された句の典型といつてもよいでせう。男には男のセンチメンタリズムがあります。おのづから行き方が違ふところに留意して頂きたいのです。強いて涙を誘はんとするセンチメンタリズムは、撰つて笑はせる喜劇と同一線上に立つべきもので、ほろりとなるよりも、見苦しさの方が先に立つものです。私は此句を讀んで感心しました。あまりに、よく光耀抄の弱點を摑んでゐられるからです。けれども掛けた篩の目は、どれも皆、同じあらさでない事を考慮されるならば、あらい篩に掛けた句の當て込みは斷然止めて頂きたいのです。

妙子さんの他の句には確かに第一線にもぬかれると思ふ優秀なものがありましたが光耀抄へ掲げることは見合せます。どうか自重して下さい皆様方の句作精進のために、どうか潔く男らしく春秋點や近作柳樽で戰つて下さい。寥々たる星空で明星の輝くことはわけもない事です。光耀抄は男子禁制の聖地です　男子の侵蝕は半ミリもゆるしませぬ。

夢路。(八)鋏置く音が十五と思はれず。夜遊びをしても人生五十年(九)繪畫、文學、運動、其他澤山(一〇)なし(一一)なし(一二)六年程前。

(279)　永田里十九

(一)永田賢次(二)里十九(三)大阪市南區疊屋町六(四)出生地に同じ(五)明治二十七年十一月廿三日(六)喫茶店(七)路郎師の「名をすてて十七八の戀もせむ」此句が今迄の中で一等好き(八)はづかしながら未だ有りません(九)芝居(歌舞伎)淨るり(一〇)有、男一人(一一)モダンガール、氣取つた男(一二)昭和三年始め鮎美氏を師とす。

(280)　河野夜王

(一)河野大一(二)夜王、俳句に八戒子を用ひます(三)大分縣速見郡川崎村(四)大阪市東成區鶴野町三〇〇ノ五〇三(五)明治三十八年三月十五日(六)鐘紡職工(七)死魚の眼よ氷の中に安らけし(閑生)抱かれなくなつた仔猫に爪が伸び(夢遊)まだ澤山あります(八)財布はたいてカラ〳〵と笑ひたり　自信と言ふ程でも無いが私の性格が出てゐると思つてゐます(九)山に登つて大きな聲で歌ふのが好きです(一〇)妻あり男の子一人五ッ(一一)陰險な男(一二)昭和四年春住夢遊先生に手ほどきして戴きましたが今に駄句ばかりで先生に迷惑をかけてゐます。

柳の絮

長野吉高

（八）

「オヤ、この腫物の膿汁のやうな、ドロドロとしたものは何んだい？」

猫庵君は、冷藏庫の中から小鉢を取出して雨軒居士の鼻先へ突きつける。二人とも、猿股一つの素裸だ。

「こりやあ、馬鈴薯を潰して生卵と摺り混ぜ其れに鰹節、胡麻鹽、胡椒が入れてある。」

猫庵君は首を捻つて

「ふゝン——何んてものだ？」

「解らないね。」

「變な臭ひがするよ。」

「道理だ。こいつを拵へてから既に一週間餘りにもなるだらう」

吃驚した猫庵君、慌てゝ小鉢を元の所に置く

「冗談ぢやない。幾ら冷藏庫に入つてゐたからつて、其んなものを喰はされて堪るものか——。」

雨軒居士は、玻璃器に盛つた蛸の足のやうなものを取出す。

「これは怎うだい。美味いよ。」

「何んだ？」

「葱のフライだ。」

「葱のフライ？妙なものばかり喰ふんだね。」

指元で一片つまんで、ポイと口の中へ入れた猫庵君、暫くモグ〳〵やつてゐたが到々庭へペッと吐出す。

「君、とても喰へん。」

「なら、詮方ない——。」

雨軒居士は早速引込める。猫庵君は、棚の上から大鉢を取下す。中を覗いて

「ふン、こいつも馬鈴薯らしいが——。」

と言ひつゝ一つ撮んで喰ふ。

「馬鹿に鹽辛いが、しかし正体不明の奇怪なものを喰ふより、これで飯を喰つてやらう。」

猫庵君には、他人の家も自分の家もない。空腹な時には遠慮會釋もあらばこそ、臺所あらしをやる。臺所の襲撃にかけては雨軒居士も亦猫庵君に劣らぬ猛者だが、時々妻君に見つかつては一喝されるので、留守の時ばかりを狙ふ。油斷のならぬ人間だ。

「猫庵君、飯が見つからないよ。」

「そりやあ困る——。」

猫庵君は、急に四邊をキョトキョト見廻す。

「や！あれだらう？」
扇形の珍奇な格好に造つた炊事場の小棚の上を指して
「ほら、あの灰色になりかけた汚らしい籠だらう。見憶えがある。」
雨軒居士は漸く氣付いて
「成程——。」
猫庵君は、すぐに土間に下り、下駄をつゝかけて五六歩大股で行つたが、流場のぬるりとした水垢に辷つて、片足の下駄を飛ばし、ドつと尻餅をつく。
「あッ！チ、チ、チ、チ——。」
「いよう！」
雨軒居士は驚いて奇聲をあげる。猫庵君は、四つ這ひになつて起上り　がら　頻りに腰のあたりをさすつて
「チョッ、虐い目に逢つた——大體此處の掃除がいけない。見給へ、ヌル〳〵してゐる。」
餘程痛かつたと見えてプリ〳〵言ひながら飯籠を取りに行く
「あ、空つぽだ。」
「空つぽ！晝飯を喰ふ事は判り切つてゐるのに、さて〳〵言語同斷な——ふうむ。」
雨軒居士は、腕を組んで一つ唸る。猫庵君は斷念したと見えさつさと歸つて來る。
「これぢや兵糧攻めだね。」
「不届至極な！」
雨軒居士、妻君の怠慢を憤慨すること甚だしい。
「ま、これで空腹を凌いで置かう。」
猫庵君は、大鉢を前に胡座を組んで、馬鈴薯の煮たのをポクリ〳〵と喰ひ始める。
「猫庵君、葱フライと一緒に喰つて見給へ。燻鮭の味がするよ」
猫庵君は手を振つて
「燻鮭の味がするかどうかは知らぬが、葱のフライだけは願下げだ。」
「君は、金聖嘆の事を知つてゐるかね。」
雨軒居士、遽に奇問を發する。
「金聖嘆？」
「この男は、餘程の旋毛曲りと見えて、例の有名な戲曲西廂記の批正をやつたり、水滸傳の文を中斬したりしてゐるが、然し支那文人中氣骨漢として憎めない人間だ。彼が、刑死に臨んで妻子に遺つた手紙が面白い。」
「ふン。」
「鹽菜と黄豆と同食すると、胡桃の滋味がある、この一法を傳ふれば死して遺憾はない——と。どうだ、風俗には馬鹿者に見えるだらう。」
「君も金聖嘆流に、くたばる時の遺言には、葱フライと馬鈴薯と同食すると、燻鮭の滋味がある、とやつては怒うだい——。」
猫庵君、突然体を前へのめらしたかと思ふとブッと大きな放屁する。雨軒居士は眉を顰めて苦笑する。猫庵君は洒然として
「屁にはプウ、スウ、ピイの三種がある。朗かに音を發して、無臭なのを以て最上とする——。」
雨軒居士、呆れて
「えゝ？」
「例へば——だね。」
猫庵君は、再び尻を持上げたかと思ふと、いとも朗かに偉大なやつを一發ぶつ放す。
「オイ〳〵。」
遺に雨軒居士も聊か興醒めた態。
「屁を下品だなんて言ふ奴は、屁の三昧を知らぬ俗者だ。君は屁の利用法を知るまい。」
猫庵君、變な事を言ひ出す。

「くだらない——。」
「ま、聞き給へ。屁の中では、其の臭味の點に於ては玉葱屁が斷然王座を占めるがね。僕は近來、新手の一法を用ゐて、厭やな奴を追拂ふ事にしてゐるが、我ながら妙案だと思つてゐる。」
「新手の一法で何んだ？」
「是れ即ち玉葱屁だ。つまりだね、厭やな訪客がある事、豫め判つてゐる時には、玉葱を喰つて用意して置く。さて愈々對談となると、暗に折を見ては一發宛放屁攻擊をやるんだ。これには秘法がある。プウ、ピイの音を出してはいけないのは勿論、なるべく惡臭鼻を落す程の强烈なやつを放つ工夫が必要だ。四五發見舞ふと大抵の者は變な顏したまゝ退散するよ。これは君だから打明るんだがね——。」
「いや、恐入つた。」
雨軒居士も、これには啞然として了ふ。
「暑い、とても暑い——此處は風通しが惡くつていけない。」
すつかり馬鈴薯を平げた猫庵君は、立上つて椽側へ出る。
「君の家へ來る毎に思ふんだが、どうも此の家の設計は拙いね」
「これは借り家だよ。苦情なら、家主の方へ持込んで貰ひたい」
「——座敷の庭は、この家だと西向きにし、玄關を北向きにせねば駄目だね。それに、此處の臺所に面した小庭なんて無用千萬だよ、ぶつ潰して炊事場を今少しく擴げるがいゝ、見給へ、これでは第一きたならしい——。」
猫庵君の言ふのも道理で、楕圓形に造つた其の庭には、陶器類の破損したのから、紙屑、雜草とまるで塵芥捨て場のやうになつてゐる、右手が座敷庭と仕分る板塀で、正面は隣家に接する高い杉垣になつてゐる。其處の小庭は鼻紙と煙草の吸殼の捨て場所と心得てゐる雨軒居士
「此處へ何か植へたらどうだらうね。」
と、始めて氣付いたやうな事を言ふ。
「このまゝに置くよりはいゝ。」
「——すると、草花が、いゝかね。」
「草花も草花だが、それより僕の家に在るやうなドウムを造つては怎うだい。蔦でも這上らすんだよ。」
「ドウム——君の家のやうなのだと、馬鞍のカリカツールに似て好感を持ち兼ねる。寧ろ棚を造つて、植木鉢を竝べたらどんなものだらう。」
「盆栽棚だね。惡くはないが、然しドウムの花と違つて、君のやうな無精者には世話が出來ないと思ふが——。」
「なアに、やるサ。」
雨軒居士、早速庭へ下りる。
「今から、製作に取りかゝらう——えゝと、板と棒杭があればいゝね。」
「いや簡單に言つてのけるが、第一其の板からして無いだらう」
「板なら——ほらあの向ふの壁に掛つてゐる。」
猫庵君は眼をパチつかせて
「巫山戲ちやいけない。あれは炊事場用の器物棚だ。」
「だから、そいつを庭へ移轉さすのだよ。」
雨軒居士は、金槌と釘扳を持出して、棚の取外しにかゝる。
猫庵君　驚いて
「亂暴だナ——奥さんに叱られるよ。」
「かうして、棚攻めにしてくれる——。」
「江戸の仇を長崎でやる心算かね。」
「當つた——。」
雨軒居士、やつと棚を外す。一間餘もある。
「棒杭を立てゝ、其の上に此の板を置いて、釘をカン〳〵とやればわけはない。さて——と、其の棒杭だが——猫庵君、其處でぼんやり見てゐないで手傳ひ給へ。」
「よろしい。一臂の力を貸してやる。」

猫庵君は庭に出る。雨軒居士は、椽の下へノッ〳〵這込んで丸太棒を引摺り出す。直徑が四五寸もある。

「これは長過ぎる。手頃に切つてからでないと仕事が出來ない——鋸はあるかね。」

「有るにはあるが——。」

雨軒居士、すぐに鋸を持つて來たが、鋸とは名ばかり、赤錆て歯が大分缺けてゐる。

「なか〳〵の逸物だナ。」

手拭で向ふ鉢巻をした猫庵君は、丸太棒を椽にもたすと、脚で押へてゴシ〳〵きり始める

「はて？手應へがない——。」

側で見てゐた雨軒居士、氣を焦つて

「退き給へ、僕がやらう。馬鹿と鋸は使ひやうだよ。」

猫庵君と代つたのはいゝが、鋸は相變らず丸太棒の上を走るだけだ。汗だくになつた雨軒居士、フウ〳〵肩で息をして

「骨を折らすね——ほら、お代りだ。」

今度は猫庵君だ。ゴシ〳〵又始めたが、丸太棒は二分と切れてゐない。猫庵君は到々鋸を投げて

「駄目だよ。この調子だと二三日かゝる。」

ガタン！

突然音がして勝手口が開く　其處から、色黑い脊の低い、栗鼠のやうな感じのする洋服男が顔を出す。「賀良苦多」雜誌の編輯記者だ。

「あ、矢張ゐらしたんですね。玄關の方で暫く待つてゐましたが、その——こちらじお聲がするやうでしたから、大變に失禮とは思ひましたが此處から——。」

一息に饒舌つてペコ〳〵頭を下げる。

「ほう、賀良苦多君が、いゝ所へ來た。」

雨軒居士は何時になく歡迎する。賀良苦多君は恐縮の態で這入つて來て。

「や、これば猫庵先生——。」

猫庵君は、この機に椽に腰を下して丸太棒とは手を切る。

「新手の欲しいとこだつたよ。」

「へえ？」

賀良苦多君は解しかねると言つた顔。

「君、この棒をきつてくれないかね。」

雨軒居士に鋸を突きつけられて面喰つたのは賀良苦多君だ。

「え、？こ、これを私がやるんですか——。」

「賴むよ。」

「何んですか、一体この棒は？」

「後で判る——兎に角やつてくれ給へ。」

「へえ——。」

賀良苦多君は、不承不精に上衣を脱いで、ごうやら不思議なものに觸れるやうに、鋸を受取つて棒をきり始める。

「ヨイショ！ヨイショ！は、コラ！は、ヨイ！は、ヨイショ！」

油汗を浮かしながら、賀良苦多君は威勢よく調子外れの掛聲でやつてゐたが、段々弱り込んで

「これは——駄目です。」

「そんな筈はない。現にもう三分餘りはきれてゐるんだからね三人で代るぐ〳〵にやらう。」

雨軒居士は剛情な事を言ふ。賀良苦多君は泣きさうな顔して

「甚だ殘念ですが、この位でご容赦にして頂きます。實は、今日は少し折入つて先生にお願出ひがありますので——。」

「何んだね。」

「この十月には特輯號をだすに事なつてゐるので、其れで色々と奔走してゐるのですが、先生にも是非何かご執筆をお願ひ申したいので、其れで、ハイ。」
「また原稿だらう。」
「左樣で——。」
「君とここの賀良苦多誌へは、八福君からの依頼があつたので、この前には一寸書いたんだが、然し後まで續いて書く約束はしないよ。」
「其處を折入つて、どうか一つ——。」
「僕は近來、どこの文藝雜誌へも一切筆を執らない事にしてゐる。」
「は、それは萬々承知は致して居りますが、特別のご芳志を以て——。」
「ま、止めやう。」
かう雨軒居士に突放されて、必死になつた賀良苦多君
「こ、この棒をきつてご覽に入れますから、どうか何なりとご執筆の程を——。」
猫庵君は到々吹出す。
「妙な取引になつて來たね。」
雨軒居士は、猫庵君の側に腰を下して
「どうせ賀良苦多雜誌のがらくた記者の言ふ事だ。うつかり承諾すると後が面倒だ。」
「人間まで、がらくたつて理か——。」
賀良苦多君、閉口して荐りに頭を掻く。
「昔、尾崎紅葉が飯田町の硯友社から「我樂多文庫」を出してゐたが、同じがらくたでもこれは今の菊判の二倍位の薄つぺらなものたが、現今のジャアナリズムには見る事の出來ない編輯ぶりが窺はれる——ケチ臭いところが無いよ。」

猫庵君は賀良苦多君に惡まれ口を利く。
「今月は、本屋への拂ひが豫想外に多い。持越の借金で首が廻らない程だ。印税は當分はいつて來ないし——。」
雨軒居士は、どんでもない泣言を並べる。
「本が賣れても賣れなくても、生活に係りの無い者なら兎も角我々のやうなビイ〳〵では、賣れてくれないと困るからね。書籍も亦一の商品である以上、其の製作産意識は賣る事にあらねばならない。だから、賣れない本ばかり書くのは損だナ。」
「窮してジャアナリズムと妥協か——。」
猫庵君、大きく首を縱にふつて
「その通りだ。」
賀良苦多君は、得たりと雨軒居士に
「ご迷惑ではござありませうが、どうかよろしくお願ひします」
「ござありませうより、かうなると商賣氣が出る——では、材料だけ口述で提供して置くから、この提供料を原稿料に換算して、其して——。」
賀良苦多君は狼狽して
「そ、それは困りますよ。」
「だつて君、ラヂオで放送しても金一封にはなる題材だがね。」
猫庵君、突然横から
「だん〳〵話がしみつたれて來る——一体その材料つて、怎んな材料だい。」
雨軒居士は、胸毛を逆撫でしながら
「印度にね、カマといふ毛色の違つた愛の神がゐるよ。キユーピッドのやうな貧弱な神ではない。カマの神は、手に甘蔗の弓と矢を五本持つてゐるが、甘蔗とは考へてゐるだらう、キユーピッドは盲目で、矢は一本しか持つてゐないが、五本とは素晴しいね。然も、このカマの神は雀の脊に泰然として乘つてゐる

雀の脊から矢を射るのだ。」
「ふン、雀とは氣が利かない。こりやあ、天馬にでも乘せた方が一層悲劇的だがね。」
「それよりだ、此の神が五本の矢を持つてゐる意味が判るかい」
「定つてらアね。射損じた時の用意だらう。キューピッドより弓術が下手と見えるナ。」
「違ふよ。これは人間の五官を意味する。僕も最初は此の謎を解くに苦心したよ。これなら口述でも商品價値があるだらう」
かういふ事になると、默つてゐられないのが猫庵君の性だ。
「其んなものより、口述でなら僕が無料で材料を提供してやる」
「また禁止もの〻怪しいフランス小說の切り譯しだらう。」
「默らつしやい！これは僕が恥を忍んでの過去告白だ、君等の耳に容易に入るべき話でない。」
猫庵君は雨軒居士を、斯う大喝して置いて
「賀良苦多君、ごうだ。」
「は、有難いことで——。」
乃ち、猫庵君は一咳する。
「僕が若い頃、フランス留學を命ぜられてゐた時の事だよ、パリの町外れの、錆た鐵門のある古風な其處の下宿の娘に戀してね。その娘は、シトロン色の金髪が肩に垂れた、恰もグレエゼの繪を見るやうに可愛らしかつたが——。」
「な、なる程。」
賀良苦多君は、女の話となるとすぐに夢中になるらしい。
「——其の夜は、物凄い大嵐だつたがね。僕は文部省へ研究物の報告をせねばならなかつたので、部屋に籠つたまゝでゐたが何時ものやうに娘がコーヒを持つて來てくれた時には研究物どころでない。レモンに似る彼女の体臭が鼻を打つと、どうにも堪えられなくなつて來た。男は、かういふ時には血が狂ふものだ。で、悶々の情を打明るべく彼女に近づくと、何んと思つたか彼女は部屋の隅の寢臺を指す——。」
「ほッ。」
賀良苦多君は一膝のり出す。
「僕が、つト振返つて見ると、これはしたり寢臺から床の上へ鼠色の細長いものが垂れてゐるではないか——そも、これを何んだと思ふ。」
「はて？」
「褌だよ。」
「ふぇン——褌ですか。」
「其の頃の留學生は、こいつを持つてゐないと褌クラブ員になる資格が無かつた。つまり大和魂の無い奴といふ意味だよ。この褌といふものは——。」
「褌より、悶々の情の方はどうなりましたので——。」
「あ、それか、成程、褌どころでない——で、愈々彼女に近寄つて總べてを打明けやうとした其の瞬間、實にその瞬間だつたね。天軸が折れたやうな物凄い音響がして、呀と思ふと同時に僕は腰を抜かして、其處へへたばつて了つた。」
「ど、どうしたんです？」
「いや、時もあらうに、折り惡しく近くへ雷が落ちたのだ。」
「ふぇン——。」
「餘程氣強い女だつたと見え、笑ひながら僕を引摺り起すと、寢臺の上にほりつけて其のまゝサッサと部屋を出て行つたが——ね。」「へえ。」
「それなりけりだ——これでおしまひ。」
大欠伸をしがら雨軒居士
「雷に腰を抜かして、女を口說き損ねるとは餘りだらしがない」
猫庵君、けろりとして
「なアに、フランスの雷公が嫉妬したまでだよ——雷に戀を讓りし男かな。」
賀良苦多君は、額の汗を拭きながら
「あ、がつかりした——。」

（つゞく）

春秋黙

路郎選

涼しさを巡査花火へしばし立ち　京都　蘭山
學閥に呑むことはなほ氣がそろひ　同　同
世渡りで八百屋講義をする得意　同　同
事なかれ主義へ挑むで來る事よ　大阪　黑天子
手加減をすれば無能とつけ上り　同　同
日本晴金でも拾へさうに出る　東京　摩邪火
焦燥を持てば夜店で人を押す　同　同
善政を布くのに金は無かりけり　大聖寺　白花子
既製服營養不良型を買ひ　同　同

八月十日男兒失ふ（二句）

水枕すゝり泣き泣き水をぬく　大阪　俊一
せめて手向けん飲ましたかつた氷水　同　同
頼るにはあまりに若き醫者でありウエートレス麥酒の客へ二人くる　螢ヶ池　羊三
集金のギセイ白靴白ヅボン　同　同
脊廣着て厚司の前へかしこまり　大阪　三碧
東京は東京はといふ友となり　同　同
こだませぬよな聲は出すまい　小松　しどし
ロースより安く値ぶみをされて死に　同　同
行末は行旅病人それでよし　大阪　利生

アトリエに借りた別莊蚊が多し　同　秋無草
路切を舞妓ははでに走りぬけ　松山　同
大阪は寢てる二人で戯れよう　同　みつる
自惚れりや惚れた女は横を向き　大阪　同
子を抱いていつちうしろから詠歌　同　了念
いゝ月が煙草を無駄にするばかり　明石　同
驛が出來此處も地主が儲けてる　同　樹光

プルの結婚

秀才と才媛にする金の世だ　大阪　樹光
訴訟してあつたら秋をやりすごし　同　神戸　素生
和解する心になつて萩にゐる　同　同
大學を出て百姓になれぬ子よ　同　大阪　明晴
易々と腹を開いて診ると云ふ　同　同

自殺（二句）

縊死をするには人の眼が多すぎる　螢ヶ池　禮二
病故の死と思はれるのが癪だ　同　同
缺食の兒童は陽をば暗く見る　東京　ひさし
良い方に解し自ら安んじぬ　大分　左映

女には變りは無いが藝者なり　佐賀　一寛
海金剛舟一艘のゆれて行く　朝鮮　太閤
カン〳〵帽電車の風に突當り　犬山　練屋丁
看護婦の白い姿も秋のもの　松阪　沃里
超特價賣切れぬ間と呼びかける　鳥取　暢山
秋の風簾を一つづゝ外し　金澤　今雨
競爭に勝たねばならぬ智慧をかり　大聖寺　溪鶯
珠數を持たずに講演を聞いてゐる　堺　淋一郎
あぶれても強くと妻に云はれたが　神戸　天來
十六夜妻も童話につりこまれ　京都　草村

虚榮に憧れる

蜃氣樓へ拔手を切つて泳ぎゆく　同　一正
借金があるとは見えぬ蓄音器　蛍ヶ池　四郎
カフエーの亭主きたなう奥に居る　同　章
また秋が來たすてゝこをはきませう　同　愚寵
賴母子の金とはベッド知らぬなり　同　藏六
プロの汗親孝行がしてみたい　同　美洋朗
よい軍鷄た錢になるぞと買うてゆく　同　沙門
秋深し惱みを捨てゝ蟲をとる　同　舟路
淋しさは借をうづめる事になれ　大阪　柳次

うつむいてうつむいて女すれ違ひ　同　無鬼
世間もう裸の俺を見捨てたり　同　洋々
日に向けば陽氣になるがをかしくて　同　喜由
遊女街帶のゆるんだ男來る　同　おさむ
早立ちは宿騷がせて一人立ち　同　吐句坊
ルンペンの避暑地はビルの横にあり　同　青兒
借りた家何でも彼でも直させる　同　荷十
サラ〳〵とシヤツも涼しく見廻れり　同　四五磨
間違つていぬサラリーが淋しくて　同　宏朗
オーブンがよいとは女づう〳〵し　同　忠彌
結婚の話にうつりまた淋し　同　巷巴
尖端を行くなこほろぎまだ暑い　同　撫翠
四五人も有るに點呼の復習の　同　泉流
貧乏に別れて妹よく笑ひ　同　菊路

かつて戀人たりしK子へ

夫の不足言ひ〳〵二人目を孕み　同　山茶花
引越して來たに養子は直ぐに知れ　同　光
就職へ妻も若さを取戻し　同　苦茶坊
人間が積重つて洋館聳え　同　いわを

金魚の死

死んでから水のかげんも聞かされる　不明　梨風

近作抄録

ひろし選

秋ひたゞ來て日草草の愁へる　島根麗亟
主義に徹して老妻に無口なる　同　同
現在に甘んじ鷄を呼んでゐる　同　同
情痴にくだけし黒髪の香が淫ら　同　同

發熱して

眼閉づれば逝いた友らが來てくれる　螢ヶ池　一流

少女死す

純潔を守りみにくき世にあきれ　同　同

久し振に我家に寢る

ちゝはゝゞといねて幼き頃の夢　同　同

車窓より

陽に立てる鮮人を羨ましく眺め　同　同
結局はなぐられ損の辭令です　神戸　重陽子
榮轉の噂も聞かじ菊の棚　同　同
座談會喰ふに困らぬ男が居　同　同
母の夢妹の夢秋動く　同　同
引きずつた鎖へ杭を打ちこまれ　笠岡　傑月
眞すぐに刄よ俺に向いてこい　同　同
點線を辿り形が出來て死だ　同　同
あけすけに死ねゞ云はないだけのこゞ　螢ヶ池　左右路
踏張つて生きねばならぬ母在ます　同　同
處世ゞは汗ゞ涙の點綴か　同　同
新妻の晝寢をせない糸切り歯　京都　みの坊
純で居れ大人は哀しい事ばかり　同　同
南京蟲の如く鮮人の住まひ　螢ヶ池　銀花
蠟灯チョロ〳〵肺病の悲哀　同　同
明日のある子ゞ夕燒の丘を降り　明石　啞聲

面會

落ちついた眼に履歴書の數が讀め　同　同

施療院にて（二句）

人類の爲モルモットになつてやう　螢ヶ池　青鬼
アルミの食器で無味く食はせる　同　同
二十四の紅の濃さなるフト淋し　大阪　常磐木
日向葵へ燦然ゞ陽が滿ち溢れ　同　同
金魚釣女給の戀の鳥　瞰圖　京都　欸乃
子にあたる妻の罵聲に出そびれる　同　同

ごうしても付かぬ思案を寢てさぐる　大阪　美登里
座蒲團の樣に父は死んで行き　同　同
不景氣をすく〳〵〳〵とのぶ煙　高知　比呂詩
朝露へ一鎌入れし穂の重さ　同　同
汗の用がたわゝにみのるを立禁だ　熊本　水人
斷髮の首筋靑く秋が立ち　同　同
雄大なと云ふに反抗したくなり　吳　吳柳
教育も受けましたと妻の奴　同　同
追懷のない先祖の墓に立つ　神戸　貞三
好隷經濟の證唆都會のアスファルト　同　同
散ばつた團扇の骨に五燭光　大阪　夜王
賣上を數へる人のプロフ井ール　同　同
妄想の蜘蛛一匹に惱まされ　神戸　獨眼子
緊縮はのれんにつつぱりする如し　同　同
とんぼつるわらべ心もよしとせん　螢ヶ池　晴夫
夕陽あか〳〵まだ命あるベット　同　同
隙の無い形で麗人目をつむり　神戸　竹風
月給の手前嫁にと言ひそびれ　同　同
膝折りて頭を下げて生きて來し　大阪　卜居
泣きし子のほゝひげ撫で眠てしまひ　同　同
朝顏の咲く朝々の幸が來た　螢ヶ池　眠舍
夜の蛙人が死なうが死ぬまいが　同　同
秋風の立つを知つたる腹具合　大阪　八步

やけ酒も飲めぬ弱氣に生れつき　同　同
お悔みの涙今日も出すのですか　螢ヶ池　靜太
人知れず思ひそめしが肺病だ　同　同
初產に歸る古里嫁の里　大阪　靜香
里歸り嫁は夫のことをほめ　同　同
後悔の來る日を里で待つてゐる　金澤　木偶人
眼の屆く限りを朝の西瓜番　同　同
責任の重いばかりが長男さ　大阪　憲坊
オイと云ふ名で妻のあまんじて　同　同
舌出してさみしきこゝろ見られける　螢ヶ池　康夫
甲蟲僕は線病質なんだ　同　同
患者から絞つた金に株があり　大阪　三千丈
事務服の下では汁と血があばれ　同　同
孕み犬居ごころも無し日の盛り　伊豫　蛙念
いゝことを喋舌りのこして荷をほどき　同　同
父と子と足を比べる砂埃り　函館　里魚
滯在の顏でおみおつけを賞め　同　同
出戻りの勝氣を髮の艶に見せ　京都　一枝
ピアノなど彈ひて二度目の母若し　同　同
葉の蔭に畫のうたゝねくつわ虫　滋賀　白扇
夕ざればいざ白粉を溶かんかな　大阪　宵吉
白粉がすつかり剝げた泣き別れ　大連　薫
最夜中の時計の捻はゆるんでた　大阪　紅

吾が友に居處知らす氣になつた今日　螢ヶ池　子朋
屈從へ卓上電話がものを云ひ　大阪　素月
柿の實のころりと落ちて秋の風　東京　佐保蘭
秋を知る一錢銅貨に夜は更け　大阪　愛緒
演說を聞くより神代の夢を見よ　西宮　三代吉
インテリの所詮は斷片的に生き　大阪　世紀
逞しい腕でポスター呼びかける　高知　春水
働けば働くほどに搾取され　尼崎　義郎
汗ばんだ手に繭代の哀れなり　島根　葉村
小作人穫ればお米が安いなり　大聖寺　醉羊
夢も現實に負け　大阪　葉光
君やがて死ぬのだよ　高岡　かづを
コスモスのたほれたここで花が咲き　螢ヶ池　白嶺
夕顏の咲くに陽足の遲かりき　大聖寺　一寛
蒸し暑き夜を母の咳妻の咳　大阪　失名
子澤山忘れ勝なる日記帳　泉南　鯉友
仁王雲眺めて心納らず　大阪　岩石
豆の蔓物欲しそうに延びてゐる　島根　鴉夫
氷柱にネオンが灯るジャズバンド　大阪　こも坊
やりきれぬ金庫に大黑笑ふて居　松本　正司
强意見金庫の横に座らされ　長野　有爲郎
ふれし指輪に昔の戀があり　大阪　柳馬

モヒに剛れ盜みに剛れて露天に寢　奉天　深太樓
墓參りする日に歸つた旅の父　大阪　詩郎
お自慢の先をばこつつかれ　山口　宙芥
茶も花も歌も作れて二十七　大阪　一騎
枕邊の花に友情が薫つてる　螢ヶ池　松雨
アッパッパ肥へた女房と貧しく居　大阪　石波
下手から出れば凡人横柄な　羽衣　錦石
人間も鳥も生々してる秋　大阪　小柳子
佇立てゝ歸れば一ぱいさす西日　大和　白帝子
泣きながら兄の喧嘩にけしをかけ　大阪　水江
妹の希望次男で俸給者　愛媛　英賀夫
親展に思ひ當つた封を切り　大阪　白柳子
辷り込む刹那カメラへ土埃り　高知　紫白
實力の相違外野の暑い事　大阪　鐘生

簡閲點呼

緊張した顏一列に見て居られ　愛知　芙蓉
爭議團沈んだ顏が隅に立ち　大阪　寛柳
就職のよろこび靴を磨いてる　滋賀　幽光
府議戰を前に暑中を伺はれ　大阪　白峯
思ひ切り抱き締めたのも夢の國　高岡　かずま
客一人一人親しみが持てる嬉しさ　大阪　木公
病弱な子の影法師長くのび　愛知　巧笑
涼み臺千鳥の曲の流れて來　大阪　青米

茸の香を探りて

——本社吉例松茸狩の記——

住田亂耽

十月十八日。快晴。大阪の屋根の下を逃れて本社恒例の松茸狩に鳥取の荘へ、一日の清遊を試みんと集まるもの左の十一人

午前十時難波驛を出發する。

路郎、萬よし、ひろし、綠雨、新水、京郎、夕鐘、萬よし大人、菊さん、しげさん、亂耽

秋の郊外をましぐらに突き拔ける電車は我々に山を、海を、野を、心ゆくまで味はしめて呉れる。僕の向ひ側の座席で、三人の尼が蟇口を開けて小錢を出し合つてゐたのには變つた風趣を感じた。尼と經濟、尼と蟇口。秋の電車で、小錢をいぢつてゐる尼さん達。コント的社會實相ですれ。

山に着くと、變聲、嬌聲のカクテル。あまたの人の濁遊に先づ若干感じを惡くする。常連のかほる、素人、琴人、特にこの會合にいつも世話をして下つた朝陽氏の顏が見えなかつのは淋しかつたが、萬よしの硬一點ぶりは、相變らず一行の氣持を嬉しいものにする。

堂々と國家を論じ合ふと言ふ路郎主幹と萬よし大人の二人を殘して皆はいよ〳〵茸狩の實踐に山へ案内される。先頭のひろし。茸の簇生してゐるのを見つけ、姉君の萬よし夫人へ大きな聲で敎へて姉弟のうるはしい愛情を發露する。茸狩といふものは男がやれば、グロテスクこの上もないが妙齡の婦人の混らうものなら、たちまちにエロチツクなものになつてしまふ。幸か不幸こんな婦人は居なかつたが松茸狩は秋のエロとグロとの交錯だ。今年は例年よりも茸の出來は惡かつた。それを案内人は仰山相に踏むな〳〵と注意するのだから、くすぐつたい。僕は相變らず、同じ格好で生えてゐる松茸に愛想をつかして二本しか採らなかつたが、それでも全部で二貫目程の收獲はあつた。

此處を匆々に引き揚げて留守軍の所へ歸る。濁遊連の爲にテントを占領された留守軍の萬よしと主幹、野天で盃を傾けつゝ微醺を帶びて御氣嫌である。暫くしてテントがあいたからとの注進に早速そこへオンパレードをやる。

テントにおちついて盃の亂れ飛ぶ頃、ジャンケンによつてかくし藝の公開に移る。ひろし司會の辭を述べ指名によつて萬よし獨壇場のめい臺詞。（路郎氏の評によると、萬よしの澤正は年々惡くなつて行きつゝあると〉以て想ふべし。次に新水の土佐節、京郎のやゝこしい挨拶、菊さんのおけさ、亂耽の淡海節、夕鐘の東西成駒屋の臺詞、それからはETT（、ETCの變唱である。このうち夕鐘の臺詞が本日の壓卷であつた。主幹は風邪を口實に唱ふのをゞまかして、官僚的逃避ぶりのあざやかな所を見せる。

僕は庄健一の喋る事よりも庄萬よしの駄辯を聞く方が遙かに好きだ。「妻帶幾十年にして本日初めて妻あるを知る」なんて惚氣を蒸散させたり、隣りのそこ拔け騷ぎを評して「遊びは相變らず進歩せんな。人間は動物の進化したものである事をまのあたり認識した」とか氣焰をあげるあたり嬉しいおぢさんである。

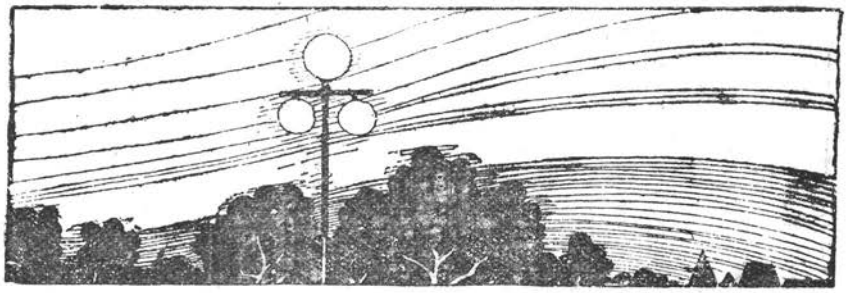
この間、綠雨は默々と鍋に向ひ、萬よし夫人は色々と酒間を斡旋し、主幹は、にや〳〵と盃を重ねて風邪がうつつては不可ないから献酒はしないと宣言して病院の事務長らしさの一鱗を示される。

三時山を下る。綠雨の會計交渉の間、萬よし、センターの腕をふるつて下の池へ石を投げ初める。その投石も氏の酒癖の一つだ。ひろしが審判官になつて皆も石投げの競爭だ。

醉ふて來て秋へしきりに石を投げ　亂耽

歸る途々「柳人と俳人とは、少し違ふよ。之は秋の千種ですよ」と言ひながら、萬よし秋の大自然から盛んに搾取をやる。

之も愛孃敏子さんの寫生の爲だと聞いて、よきパゝなる哉と思つた。夕鐘、京郎、新水は和歌山へ、後の八人は再び都會苦の大阪へ、鳥取の荘で秋を別つ。終りにこの會に對して、色々御盡力下さつた、一杉氏を初め南海の方々に厚く御禮を申上げて筆を擱く。



川柳

幽明無線電話

秋農屋

其四

○秋農屋
●青陽舍柳

○オイ柳君、今の二人の話を聽いて居たか。●九世の後に居て皆聽いたよ。○あの話を聽いても、君は怒らないかえ ●事實だから怒られもしないさ。○〆太は今何をして居るね。●冥土へ來てからは、好きな義太夫も語れないので、阿菩陀羅經を唸つてゐる。○阿菩陀羅經とは奇抜だね、併しあの人には、それが相應であらう。……昔、九世川柳の選擧競爭の時、君は羽前地方へ、遊說に行つた事があつたね。●ウン明治廿六年の早春二月頃だ、まだ汽車も自動車も無かつた、羽前の山間の、積雪を踏破して彼の地に着き、同志の翕合に努力したのだ。あの時は交通の不便なのに最辛苦を嘗めたが、先方の人達は、僕が洋裝で行つたのを看て、東京の大宮でも優遇するやうに、大いに歡迎してくれたので、演說も處々で遣つた。○例の激越の口調で、君が演說した時には、聽衆は悉く感奮したであらう。●それが實に可笑しいのだ。文化の程度が甚低い、お百姓さんが多いので、演說の主旨などは、一向に呑み込めず、只、東京の〆太君とやらは、何でも偉い人らすいから、投票は其人に入れましべえ、といふやうな次第で、意外に與し易くて、大多數の贊成者を得たのだ。○其時、同地の佐々木魚心といふ人を、〆太派の總參謀にしましたか。●何人から聽かれたか知らないが、そんな事は絕對に無い。○それでも羽前荒砥町の、木枯庵櫻風といふ人が、大正九年四月發行の「鯱鉾」第九卷第四號に、「此人は八世沒後九世相續爭の際、隱然〆太派の總參謀として大に畫策する處あり」と明記されましたよ。●その櫻風といふ人は、僕の記憶に無いやうだ。恐○らく君とは、一面識もない人でしやう、それから櫻風といふ人は、壽鶴も〆太派の參謀であつたと書かれたのです。●當時の事情をよく考へてみるが宜い、九世の選擧には、各地方の社中に投票させて、それを取纏めて東

京に送り、而して開票する規定であつた。各地方に於ては、其處の一二の有力者が、候補者の某に投票するといへば、他の人々は皆悉くそれに追從して、同一の候補者に投票したから、兩派の競爭は絶えて無く、至極平穩に投票を濟ましたが、東京のみは地方と大いに異なり、兩派の競爭が劇甚であつた。その東京の選擧運動に、たとひ參謀となるとも、まだ汽車も自動車も無くて、交通不便の羽前の山間に居坐つて、日々の運動駈引萬端を、畫策する事が出來るであらう歟。亦、壽鶴を參謀としたといふのも、全く虛言といふ可きだ、彼れは小使に少し毛の生へた樣な男だ。それからあの時に、〆太を九世川柳に推薦する諸彥連名といふ物を印刷して、各地に配布したが、其中に佐々木魚心の名は無い。亦羽前には、雅外、悠哉二氏か地方判者として最有力者であるのに、此二氏を差措いて、總參謀にするなどゝいふ事は、夢にも考へられないことだ。全体、〆太派の總參謀に羽前の山猿、イヤ失敬、魚心とやらを推したといはれては僕の名譽にも關するのだ。莫迦莫迦しいにも程がある。あの競爭には、僕自身が參謀ともなり、闘將ともなり、兵卒ともなつて奮戰したのだ。今の魚心の事などは、櫻風といふ人が、何人かの虛說を聽いて、それを實說と信じて書いたのか、遠い昔の事で誰知る者も無いと思つて、自身に揑造したのであらう。併し廣い世間には、當時の事情をよく熟知してゐる人もあらう。○君の親友であつた、秋風窓獸痴君がまだ健在ですよ、●さうだあの人ならば、昔の事を知て居る○默痴君に逢ふたびに、よく君の噂をしますよ。●今度お逢ひでしたら、宜しく云つて下さい。アヽ柄井君が來ました。これで失敬します○失敬。●失敬。

其五

●九世綠亭川柳
○秋農屋

●大きにお待遠でした、今、十世が看えたので、一杯やつた處でした。○御酒宴中にお立たせ申して、お氣の毒でしたね。●イヤもう濟んだのです。○君が「狂句の栞」に書かれた初代の畫像と、五世所用の印章の事ですが、畫像の方は、洵に面白からぬ事になりましたね。●あれは八世の病死された時、肚黑の壽鶴が、未亡人を瞞着して、自宅に隱匿した後、〆太君の手に渡した事は、社中一同誰知らぬ者は無い。それで雜誌に、あの如く書いたのであるが、僕が〆太君を被告として、横領罪の告訴をも、敢てしない形勢をみせたので、〆太君は、畫像の置場に困り、いろ〳〵智惠を絞つた末、其時、羽前地方に句會が出來て、その主判者となつたを幸に、句會に臨席すると稱して、畫像を携帶して行き、遂に魚心の宅に預けた次第である。一說には預けたのではなくて、熊の皮一枚と交換して來たのだとも云ふ。〆太君が、羽前より歸ふして後に、自宅に來客のある每に熊の皮を看せびらかした事は、多くの人が知悉してゐる。○初代川柳の、無名庵と刻したる石印は、君の手より、十一世に傳へられたものだと、某氏が「鯱鉾」といふ雜誌に、記述された事があるが、あれは事實です歟。●イヤそれは虛說ですよ。あの

印章は、僕が隠退するか、死去した場合に、後繼者即十世川柳に傳ふ可きものです。然るに僕の生前には、まだ後繼者は豫め決定してゐなかつた。それに海のものとも、河のものともつかぬ、開晴舍昇旭君の手に、あの印章を傳へる理由が無い。此事ばかりでは無く、當時の事情を、少しも熟知しないで、自分の憶説を、雜誌抔に書かれるは、實によくない事だ。○憶説といへば、君の在世中に、二三の雜誌を發行されたが、屢々憶説や妄説を書かれましたね。其中にも「魯文珍報」第二號に、×水亭×好と、歌川國盛とを同一人と書いたり、「柳の栞」第二號に、文日堂礫川を、雁金屋清吉の號と書いたり、是等は人を惑はせるものであるから、私は其の誤謬である事を、他の雜誌に書いた事もあるが、「柳の栞」第三號の、五葉亭爾丸の傳なども、前の筆鋒で、少しも信用が出來ませんね。●昔、雜誌の記事に就いては、屢々君より槍を出されたが、當時は何事に依らず、眞劍に研究する人が尠いのでたゞひ憶説や虚説を書いても、讀者はそれに心附かずに居た故、荐りに餘太を飛ばしたのだが、今日に到つては、眞に後悔して居ます。既往の事で有るから、大目に看逃がして、僕を責めないで下さい。○前にもお話をしたが九世川柳選擧競爭の時、昇旭は最初に、〆太の特別賛成者となり、愈々といふ瀬戸際に到つて關ヶ原の、秀秋の轍を踏んで、君の方へ寝返りを打つたが、あれは江戸子らしからぬ、實に卑怯のふるまでしたね。●イヤあの時は、〆太君がごうも人望が無くて、賛成者等の多くは、柳君への義理から、不本意ながら賛成した次第である故、裏切考は昇旭君一人而已でなく、外にも有つたと想ひます。競爭が劇甚になつてからも、奮闘したのは、柳君一人ぎりで、他に有力の運動者は無かつた。それに反して僕の方には、屈竟の猛者が多く居た故、結局勝利を得たのです。○昇旭君が、十一世川柳を贏ち得たのは、當時の勳功に依つてですね。●イヤそれ而已で有りません、平素、諸方の狂句會に、志評や花評などをして　多くの景品を奮發したのが、あの位置を作つたのです。○人間萬事金の世の中とは、實によく言ひましたね。今噂をした人が、其處らに居られるならば、憚り乍らお呼び下さい。●小林君は看えないが、十世が居ますよ。○それならば十世とお話をしましやう。●オイ平井君、梅本君が何か話が有るさうだよ。（以下次號）

川柳書架（四五）

重に詠史難解川柳狂句

三面子

▼關田博士自身が難解と思はれた句、一一七八句を一ト纏めにし、同好者研究者に配布された四六版六六頁の冊子である

▼卷末に「本書を御覽じて意味の判つた句があつたら多少を問はず、神奈川縣葉山岡田三面子宛御教示を願ふ」と附記されてある。

▼私費を投じて、かゝる方法によつてまで、斯界のために研究を續けられる同博士の眞摯な態度には敬服する。

道柳

道柳しん平編

▼本書の卷頭には編者の自序と井上劍花坊氏の題言がある。

▼本書は所謂道柳に素文式の漫畫を配して、新に世に問ふたものである。漫畫は宇田川せい治氏である。

▼道柳といふのは川柳による道歌の如きもので、ある目的をもつてゐるだけに川柳詩の立場から云へば横道へ外れた感がある。いゝ句もあることはあるが。

▼昭和六年十月四日發行定價二十錢四六版六六頁東京府北豐島郡巣鴨町上駒込八七五、敎乃友社發行

光耀抄

葭乃選

神戸　茂もよ

蚊帳これば炬燵がほしい病上り
言ひ足らぬ言葉へ足してやるも母
兄弟の喧嘩に母も叱られる
朝顔がのび切つた頃熱高し
体温器しぶ〳〵子供はさませる

大阪　雅子

おぢいさんのこんび目方で賣て行き
コンパクト父母親をいらだたせ
交叉點を重く嫁人の荷がこまり
さらの下駄はいてあわてゝ汽車にの
きちんと座りお母さんの足の裏

撫順　松代

大連埠頭に友を見送り

三日たてば神戸へ着くかうらる丸
子の土産女給に預け呑んで居る
男の子おひやを呉れと父を似ね

大阪　富美子

母と話が合ふよになつた二十一
子を相手にしやべつて母の長い風呂
昔話の父へ默つて酌いでゐる
千圓の指輪で料理習ふてゐる

悪い占ひが出ればも一度やりなほし
また裏へ紙がついた物思ひ

守口　武子

うろたへた時だけ來ては世話やかせ
秋雨を目懸けて障子洗ひ出し
足をふかせてるのを子等は可笑がり
だく〳〵こわいて居るのも湯のたぎり

守口　スエノ

振袖の柄見せられて話し込み
いぢらしき姉よ妹望まれる
家計簿へ節約すれば外で飲み
子を前に妻のお酌が意に適ひ
身構へる猫に夫婦の立ち上り

大阪　機見女

月見團子の話宇宙へのびてゆき
瀧壺へ訪門服が勢ぞろひ
子を抱いてラッシュアワーを見つめ

義兄を想ひて

事實は悲しうたゝねが醒めて

島根　茂都子

淋しさを紛らす歌と誰が知ろ
五杯目をかへて弟元氣なり

風もなく虫も鳴かぬ夜月こゐる
亡き母に姉に手向けむ種をまく

螢ケ池　あざみ

父の死後

しみ〳〵こ宵寢の母と父のこと
病床の陽射しがかはり秋近し
念佛の下から不平流れ出る
明月の下に溜息つくもあり
ベットから見れば青空海に見え

同　多美子

みちたつた心口笛吹いてゐる
結婚しました と言つて來る手紙
また雨になすこともなくベットに居
やせてゆくのをこらえてくれた夏でした

同　伊勢子

電車なぞ見れば罪です棚の中

同　紅葛

病床三句

涙等母に見せまい眼をつむり
につこりとして憂鬱を押しかくす
慾はない唯なほりたい丈の事
慰さめて貰ふて又も出る涙

◇　葭乃

袖張つて海が見えたか奴いか
凧落ちて驚く沼の曼珠沙華
錦魚草ブチブルこまでゆかぬ庭
糸瓜もう水をこられる風こ知り

川柳塔

素・琴・山・綠・合議選

○　岩崎柳路

王正廷なぐられる迄いゝ度胸
すこやかに寂しい秋の旅で寢る
もろぶたに彼岸の茶の子出來上り
一人つ子パラピン細工へ宿を立て
さかむけのそこでマニキューひまがゐる
サービスが露骨だつたと終電車

○　朝田新水

年末を拜まれてゐる高利貸
助勢とてあぐらに菓子を喰ふばかり
母の氣の荒さ子供の弱い星
虫聞いて二重生活とはなれり
氣にかゝる鉦に宗旨が違ふなり

○　福田山雨樓

躓けば玩具こはれた夜の音
竹籔の笹の裏まで秋の風
スピードが增して蝗も轢かれける

刀根山を訪れて（二句）

廊下を折れて折れてさびしむ
今度から心の毛布さげて行こ

○　橋本綠雨

人妻のあばらをみても寒い秋
腕組をすればからだは骨ばかり
情實の椅子が時々變るなり

◇　茨木奈緒美

頬をすぼめて街の子が歩む
鮮人のびつくりさせて露西から出
ふとんおもたく秋の日が暮れる
風の音死ぬ空想が吹き飛びぬ
桐の葉が落ちて雀がとびたちぬ
枯すゝきがさ〳〵なんとなくさびし
出養生柿の落ちてる庭に立ち
言ひまけた友のまぶたのぬれてゐる

秋のつれ〴〵

淋しさに笹の小舟をながすなり

◇　中野裸人

呑まぬときつぱり云ふた淋しさ
ダブルベットを置く場所がありません
酒は止めると云ふても叔母は腹を立て
びんつけのかざものろけの中に入れ

もう呑むなと云ふ娘を仲仕可愛ゆがり
いゝ月へ二人かしやの前まで來
かけとりの顔を見てゐる子を叱り　楊井　二南

◇

許嫁話題の盡きぬ膳につき
殘る蚊のきつさを許す氣にもなり
算盤へ今朝の不平をおしかくし
戰爭へジヤズ鳴り止むと思ひきや
獨身が一人二人と減る秋ぞ　水谷　鮎美

◇

生活の煙の中の肺炎よ
死顔と土の色とを疑はず
庭の小石に秋はまごろむ
嬌笑の生活の渦のなかと知る
無視されてしまつた書に子を試す　中澤　濁水

◇

脊の痒ゆいまで母に似てゐる娘
三男の便り小癪に笑はされ
氣に向いて出る白粉の速いこと
布團被て書のつゞきを考へる　伊藤　綠之助

◇

秋の雨柘榴の朱をなつかしみ
湯町灘溫泉にて（二句）
コスモスに此處は湖から風が來て
戀は淨かれそれなる畑の蕎麥の花

秋立ちてむなしくビール瓶ころび　西村　明珠

◇

ふところの工合を聞けば寒いとぞ
思案するところへ唱歌が歸つて來
いさかひのないこの家の猫まるし
チップを入れる財布を見せず　喜多　春秋

◇

長男はひとりで洗ふ男風呂
名月へ神經質は夫とゐる
遙かの日そのまごゝろの通ずる日
素人の藝を玄人褒めておき　阿部　閑生

◇

こんな者をたよる女房と子が二人
烏こそ斯くも烏の雌雄知る
頭搔けば爪に挾まる小砂なご
何處からか菊に流れてくる灯影　岡崎　桂枝

◇

飯も食はずに泣いて居ますと云ふて來る
老眼を友に聞かれて度をかくし
ふごの中おはぎの樣に寢たヒヨコ　岩垣　奇可愛

◇

照る〳〵坊主姉のは技巧稍まさり
讀本を兩手で持つてすなほなり
短氣だと知つた朝日の吸殼し　川村　觀月

洗濯の雫が落ちて誰も居ず
秋風に机のなかをかたずける
アトリエの微笑煙草を吸ひながら
風引きへ稲はすつかり穂が揃ひ
◇ 山本 丹路

戀のたよりに金ゝ云ふ字はなかりけり
石蹴れば秋の音してころびゆく
ぶるぢよあへ一錢銅貨のおのゝきぞ
◇ 關本 雅幽

政友も民政もなし利子で食ひ
親心
日光を觀せて日給案じられ
◇ 中島 鐵洲

新築して
蟀蟋は鳴かねど木の香たゞよひて
五百メートル上空にて
人さんがうごめくゝより外見えず
◇ 日野 華水

ラヂオ野球放送
おし出しへ投手は球をこすつて居
調和した身なりへホール更けてゐる
日曜の朝へラジオのリズミカル
飲み過ぎし松茸山の虫の聲
◇ 西田 艸樂

困つて居ぬ證據にならぬ月見なり
奥様に穢ながれてゐる忠勤
◇ 木村 晃卓

本日も赤字不安な椅子に居る
◇ 永川 秋月

今日からは君が煮て食へやいて食へ

粒々集

御影 長崎 柳秀

朗讀の代理ゝ聞て興がさめ
自惚の負けるものかも四十まで
ベランダへウイスキーの來るいゝ月夜
タイピストかき消すやうに露路へ入り
唯一課多く教へて雨に逢ひ
デパートを空想で過ぐバスガール

弔句

專攻の醫術が妻に役立たず
東京 富士野鞍馬

ぬすびゝに同情をして叱られる
梯入れぬ頭で遲刻やつて來る
そも〳〵の始めは一人馘られ
松山 前田 五健

獵犬の行方薄に風があり
務めならつい飛び切りの世辭も出る
シューゝ走る鉋晴れた秋
不行儀に掛けて課長の爪掃除

火華

▼武藏山が大關になつた。二十三才だ。十八の年に角力取になつてからの躍進振りは正に超特急、力と勢ひの鬪爭である角道に於て何人と雖もこの驀進に不服はない。川柳は角力とは違ふ。▼がしかし、川柳が角力のやうに相競ふことによつてその實力が示され、その鍛練が物を言ふとしたならば嗤面白からう。否それよりも進歩が早いであらう。競爭のない勵みのない平坦線を散策する柳壇風景を裏から覗くとそんなことが思ひ浮ぶ。

▼行司は一人だ。だがその一番に向つた鋭い兩眼は瞬きすらも許さない。しかも幾千幾萬の眼と溜息とを背負つて立つ一人であるのだ。剩え四本柱控力士の凝視が最大級の監視を怠らない直前での選者であるのだ。その制度、その眞劍味に對しては川柳の選者達が見物することもあながち徒爾ではあるまい。

▼角道にも師弟はある。しかも師を倒すに至るは師への恩謝だとして推讃されると聞く。此處にも角道進歩の必然性が横溢してゐる。川柳の新進が先輩を凌ぐのは勇ましい（その作句に於て、その熱度に於て）先輩が更にそれを鼓舞するのは奥床しい只惡いのは先輩が後進を踏臺にしてその上に乘らうとすることゝ、後進が先輩の頭つ上に登つたつもりで横着になることだ。

▼吉川英治全集が出た。大した人氣だ。大毎夕刊へは「檜山兄弟」がスタートを切つた。百萬の期待だ。元川柳家雉子郎だなんてことは此際、金持を親類にもつ貧乏人の繰り言のやうに聞えるが執拗に僕等の耳を引張る。

▼大衆文學爛熟期の寵兒たる彼に集る人氣が、川柳家の幾千幾萬を一束にして懸つて行つても追ッ付かぬ程すばらしいのはどうだ。それほど大衆の支持があるのは何故だ。

一体雉子郎を通じて吉川英治を見ることが惡いのか、川柳家にはそんな下世話は不要なのか

▼こんな觀察は下せぬものかしら。大衆文學は筋を尊んだ。事件と人物とが劇的構成の中に隆起してゐる。興味の糸が蜘蛛の巣の如くに張られてある。現實の人生から遊離した史的實在の着色が巧妙である。從つてみんなが面白がつて讀む、引きづられて讀む、考へずに讀む、暇つぶしに讀む。淺い樂しみが永く保てる。そこへ持つて來て新聞に雜誌に映畫に手ッ取り早く商品取引を結んだので加速度的に廣まつた。のだと。

▼川柳は巧みにしかし臆病にそれらの裏を撫で廻してゐるのだ川柳は遂に所謂大衆文學とは完全な並行線であるかも知れないだがそこに川柳の獨自の存在理由がころがつてゐるかも知れぬ

（以上大文字）

▼「氷原」が柳界から影を沒したあれだけの鬪士揃ひで誰一人頑張るものがないとは情けない話だ。五呂八氏の再起をのぞむ。

（青天井）

▼「三味線草」で選者資格問題が論議されてゐる。問題としては古いが、題目としては興味がある。君も選者の資格がないぞと脅かされてゐるやうで面白い。いつそ無資格選者の番附でも發表しては如何。（蟹の足）

▼信子女史よ「ふあうすと」誌上で「私の句が判り難いといふ批評を屢々耳にします」と書いてゐられますが、私たちには判りすぎます。それでもお困りでせう。あなたは矢張り以前の情緒的な句がよろしい。このごろの考へて〳〵作つたやうな句はお止しなさい。（人魚）

▼「ふあうすと」九月號名越不然氏の涙人街評論中「グロチック」と書く、又誤植かと思つたが念の爲に同誌昨年の九月號涙人街の「漫談新川柳作句祕決」を讀んで見ると立派に「グロチック」とあるのに今更呆れ果てた。涙人街よ性の惡い皮肉ばかり云つてゐないで今少し英語を勉强しては如何「グロテスク」位ひの言葉は小學生でも知つてゐますよ

（むの字）

▼關西日報では「關西の歌人」と題して既に五十數名の多くを紹介してゐる。その内の一人竹耶里親夫氏の持論を見る「現代生活の全幅に、短歌詩野を擴充せよ、吾々の短歌は現代の生活人たることにポイントを置き自由とちからと感覺の核心に於て全生存感情を表現するものであしめればならぬ」とある。だが失禮ですが、川柳は一足先きにその實踐を示してゐますよ。

（鐵筆）

人參雜話追補

蛭子生

本誌五月號の拙稿「竹馬居雜筆」に「にんじん雜話」をかき、人參にナマリを鑄込むで量目を僞つた句の解說をした反響が專門研究者から各種の文獻を寄せらるるのは私の大滿足に覺ゆる處、斯く相互扶助に因て一事を詳査するは理解上に非常な親愛をしみ〴〵感ずるのである。今村鞆翁は朝鮮風物研究學者であり、年來朝鮮人參に關する文獻を蒐集され、尙ほ二三年は沒頭するとの意氣込みで、增補文獻備考(卷一百七十八)の一節をお知せ下さつた。同書は李朝官撰の歷史的文獻もので、英祖の世に成り、正祖の時增補し李太王の代に再增補したものである。左に記す。

交聘考　日本交聘　一

…(前略)…四十五年日本島主源吉宗新立請使、以洪致中爲正使、黃璿爲副使…(中略)…【蛭子曰、四十五年は李朝肅宗王の世、我が享保四年己亥、增訂武江年表に因るに、○九月朝鮮人來聘、正使供致中、副使黃璿、從事李明彥等なり、旅宿東本願寺、此時韓人曲馬を乘るを見て、徂徠先生詩を賦せり、先生の文集に出たり、とある】…黃璿啓曰、交隣之道誠信爲貴、禮單雜物不可不精擇以送、曾於乙未信使禮單贈遺之物、無論巨細孝廟自親御覽…先朝誠信待隣之道、可謂盡矣、今番信使禮單、各別精備之意、分付該曹、而其中人蔘尤爲倭人所重、而近來人心巧詐蔘品極惡、以蔘爲衣、充以雜物、甚至於納以鉛鐵重其斤量、若以此等詐僞、見諸異國、則損傷國体甚矣、辛卯年使臣、曾以此事陳達、人蔘捧上之際、使戶禮部眼同着審、或有僞蔘之發覺者、斷以次律、今番亦辛卯定奪施行如何、從之、

辛卯年は正德元年の事、家宣嗣立の賀に派せられたもの、增訂武江年表には、○十月朝鮮人來聘、正使趙泰億、副使任守幹　從事李邦彥なり、旅宿是迄本誓寺なりしが、深川へ引たるがゆへ、今年よりは東本願寺と成る、新井白石先生、室

鳩巣先生韓人の事を司る、此時白石朝鮮人等と問答ありし筆談を、趙泰德輯錄して江關筆譚といふ、寫本一冊あり、君美來訪館所と書はじめなり、と。

鉛鐵(ナマリの謂)を以て人蔘の斤量を僞つた者は、明律に照し、そは銀貨僞造罪を援用して處分したものだそうで。

同　卷百三十九　刑考十三

諸律類記四

一　律

斬不待時(斬罪は國王の指揮に因る中上げずに即決する)(を本則とするのに此際は)

……附蔘造蔘者(附蔘とは折れた技に他のものを附けるか、人形人蔘に見せかけるべく手足の技を僞作するの類。造蔘とは他の植物を人蔘に僞造する事)

今村翁のお說に人參の僞作は支那に古くより行はれ、魏の文帝の言に以薺苨亂人參と云ふ語がある。鉛を入れたのは朝鮮の發明らしく、後には日本人も此の不正行爲を眞似たものである。方法は人蔘の肩にキリで穴を穿ち、鉛をつめ、其上に人參のクヅを挿入して容易に發見されざるようにしたものと考へられる。この事である。

人參のナマリしたたか後家はもち　(川傍柳)

の句意は一層興味的に明瞭となつて、當時の風習を知る事が出來る。

序に本誌六月號(三五頁)の一徹氏御通報の日田藥品考の引用文には、シマリデはシリマゲの誤り、蘆鰓は蘆頭が正しい「五色絲」にも「大人參の正眞をしらんと思はば、蘆頭のあたりに横筋あるを用ゆべし」と出て居る。即ち人參の頭部の莖の殘りを云ふので、これで年數を識鑑したもの、故になきは値打がないから、差込むで細工など施したものでもある。蘆頭は吐劑に用ひられしといふ。エビデ人參とは、エビの形の如く屈曲して居る。錦山製のものに限り、後に開城で眞似て作成した事もある。

「に產、單參と呼ものの二品あり」の「に產」は江參の誤りではなからうかと今村翁のお知せ、原本所有者に再調が願ひたい。江參は江原道と江界の蔘の並稱、支那日本への獻上進物品である。單參は禮單の參の略、禮單即ち禮物である。だから單參には主として江參を用ひた。二品あるに非らざる事となるが、日本で區別したものかも知れぬと。

小泉榮次郎氏編む「和漢藥考」中に人參關係の古寫本が纂集されて居ると一徹博士より聞くが私は未だ同書はみてゐない

今村翁の名著「朝鮮漫談」中、「變態變劑朝鮮人參」の一節に、「何故に人參が高價であつたかと言ふに、夫れは朝鮮政府が、一定の高き價を保持し、貿易の利を永く獨占すべく輸出量を制限して、違反者を嚴罰に處したからである。德川時代に於て、朝鮮の信使が江戸に赴いた時、日本人の人々は、爭ふて人蔘を求めた。此の信使の一行は三百名許りであつたが內職として人蔘を携帶して行つてこれを賣り付け、大分儲けた。併し夫れには內規があつて、官位の高下により、夫々制限を付してあり、若し規定以上に携帶したる者は、死刑に處せられた。夫れで苦心慘憺工夫して、密輸し、夫れが發覺して刑罰を受け、或は日本で自殺した者もあつたが、大抵夫れは地位の低い者許りであつた。支那へ行く使節も亦同樣であつた。」私は人蔘を左程のものとは思はない事、田中祐吉氏の「間違だらけの衛生」の意見に等しい。

一路集（募集句）

捨兒

阿部閑生選

捨兒ジャップとはハワイに居　方眠
兒を捨てるここから起る物語り　白帝子
幾度か生れる前に捨てゝゐる　明晴
才媛へ哀れ捨兒の名がまこひ　桂枝
泣き足つて捨子の顎にある乳豆　蘭山
抬はれて無心に笑ふ卷蒲團　荷千
捨てた兒の歳を數へて老せて行き　判生
捨兒から明けたる街の賑はしさ　錦石
捨兒の手でんゝ太鼓握つてゐる　おさむ
もう一度乳房ふくませ捨て寢る　秀江
抬はれて行く兒に遠く背延びす。　湖山
捨てた親の肚にも入つて見る　今雨
孤兒院の捨兒同志に煙があり　かずま
丸々と肥えた捨兒の怪しさよ　白花子
捨てる事も思ひ浮んだ子だったが　變人
市松は手足振かれて捨てられる　鯉友
書置を枕こ捨兒知らざらん　村樂
女らしさを捨兒に見せて抱いてゐる　愛緒
後ろ髪引かれつ鬼になつて捨て　暢山
乳を押へて捨兒のはなし　白柳子
捨兒こは不知預かる停車前　禾山
兄妹の捨子同士がめあはされ　柳光子
厄年の子は捨てられて厄がすみ　慈雨來
名乘合ふて母その頃を語りだし　白峯
捨兒した日を忘れうこ忘れ得ず　秋月
スクリンで見る捨兒は出世し　香緒樓
すてられた子供惠みの光り受け　宙芥
抬はれた捨兒親よりよい器量　ひさし
見返り〳〵捨兒の親は行つたろか　木公
捨兒の泣聲を聞かす木枯　三碧
捨兒する母へ笑びを殘したり　奇可愛
交番で捨兒ミルク飲んでゐる　素月
拾ひ人を決めて厄年兒を捨てる　紅
薄情な男のがけへ兒を捨てる　あや美
乳房から遠き捨兒の唇よ　義郎
エレベーター捨子こ五階の空氣　木公
捨兒の眉が父に似てくる　明珠
ワンタンの笛に捨兒の氣にかゝり　坊茄子
三面に捨子の顔が薄すぎる　欺乃
捨てられてゐるこも見えず車上の子　芳夫
運命の決勝點に捨てられる　武子
課長殿此子捨ざればだけの藝　幽光

▼本社社友として左記の諸君が新に入社されました。今後一層の活躍を切望します。

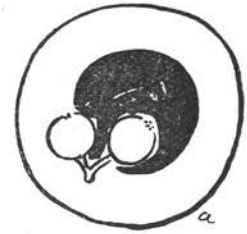
石曾根氏郎君　西村　山月君
姫田　夕鐘君　妹尾　變人君
熊谷　紅君　永川　秋月君
吉田　水車君

▼久方墓秋君は今回社友として入社されて松江支部を新設され幹事として活躍下されるとになりました。

▼本號に發表すべく一路集の大島濤明選「屏風」が編輯まで未着に付次號へ廻し阿部閑生選の「捨兒」を發表することにいたしました。

▼京都川柳社の創立廿年記念大會が十月四日午後五時から京都教育會館で催され、本社からは路郎先生、新水、亂耽、鮎美、艸樂、京郎の諸君と私が出席致しました。

▼本社川柳松茸狩十月十八日の日曜日に行はれたが、これまで數年太田朝陽君の斡旋でいたしましたが本年は南海電車の阿形一杉君が代つて我々のため御盡力下されました。



西之町 MEMO

綠雨

失業の時代のつぎの捨兒なり　靜香
捨てた兒へ自分の羽織かけて去り　佐保蘭
犬の聲捨兒ふたゝび塲所を替へ　亂花
孤兒院の賣子の背に眠る子よ　のぶを
ぶつ〳〵と捨子の記事へ獨り言　岩石
捨る兒が母の涙と別に泣き　琴風
捨てた親時効になつて逢ひに　寛柳
捨子だと薄々知つたひがみやう　一笑
捨兒した人の氣持に妻はなり　沒食子
もう一度捨兒の記事を讀みなし　白扇
人情もなく捨兒を抱く巡査　露草
乳のはる夜は涙で目もはらし　吐句坊
淋しさをまぎらす口に捨兒の詩　桂舟
新聞の捨兒貰ひ手あり餘り　洋々
捨られたと云ふ事なごは思ふまじ　菊路
捨てた兒へ眠れぬ夜かうち續き　普天
橋太郎なごゝ捨兒に名をつける　耕民
食ふや食はずの夢に捨子が戻つて來　斗光
落葉々々捨て得る兒にミルク買ふ　水車
捨兒の記事を讀んで子を見る　鐘生
思ひ出した樣に舞臺の捨兒泣き　四英子
子福者がまだ其上に子を拾ひ　双山
子を棄てゝ新聞を見る不安顏　卯三
捨兒ふと草の響に泣くをやめ　八歩
終列車出た後捨兒だと氣付き　日日城
捨兒して世間を呪ふばかりなり　柳馬
笹藪のどこか泣く子の聲を聞き　機見女
ルンペンの胸の堅さに泣く捨子　新水
大學を出て捨兒とは知らざりし　宵吉
梟のじつと捨兒を視つめてる　（人）

捨兒へ巡査こんな顏もする　柳仙
法律と德義と愛と兒とを捨て　凌冬
かくてこの捨兒へ夜の深みゆく　沐天
捨兒の親の女工とは知れり　スエノ
頭巾を取れば捨兒に角があり　艸樂
海山を越えて捨子の父は生き　四五麿
捨てられし親を尋ねて三百里　深太樓
捨てた兒の年を數へる日もあり　柳路
成功の影に捨兒の悲哀あり　世郡象
偉くなる樣な氣のする兒を捨てる　しこし
美談から捨子の素性知れて來る　壽惠兒
警官へ捨子無心に笑ひかけ　憲坊
捨てられて今は浮名の左褄　一正
萎びた乳を捨兒にふくませる　沙門
捨子にも經驗のある小使さん　靜太
捨てられる子を孕んでる繼娘　勝二
捨てた兒の幻が飛ぶ夜の汽車　無鬼
捨てられし兒の目にうつる賬　比呂詩
捨兒までさせて未來があるもの　民郎
盛り塲の捨兒〳〵ジャズを聞き　茶坊
やがて捨兒押賣をする樣になり　同
當直の巡査勝手な名前つけ　通天
他人とも知らず乳房にかぢりつき　同
滿員へこれが捨兒と思はれず　裸人
笑はして見れば捨子は笑ひかけ　同
捨兒から夜の明けてゆく屋敷町　摩耶火
捨兒とも知らず腕白に育ち　同
見も知らぬ親を恨んで强く生き　春歩
捨兒とは知らざり家をつがす腹　同

▼上野錦水君は本誌の宣傳に自費で印刷物を刷つて石川縣下の川柳家へ宣傳に努力されてゐられることを喜んでゐます。

▼阿部閑生君は大阪時事新報から川柳の選を依頼されました。「手帳」十句十一月十日〜切「燈火」十一月廿五日〜切です。投句先は大阪市外豐中町千歳通二丁目同君宛です。大いに投句される樣にお奬めいたします。

▼中澤濁水君は十月十六日目出度結婚されたそうです。お喜び申しあげます。

▼西田艸樂君は十月九日清瀧から嵐山方面へ遊んだとの便りに接しました。句に「清瀧の秋に濁るや雨の後」

▼永田里十九君は本社の例會用に鉛筆一百本寄贈されました。御厚意を感謝いたします

▼熊谷紅君は十月五日商用で横濱から、同十一日には鳥羽からの繪葉書を寄せられ。句に「窓あけて頂上だけの富士の山」

▼喜多春秋君は十月十七日養老の瀧へ遊びに來たが紅葉にちと早いと云つて失望の繪葉書で便りがありました。

▼ふあうすと社の楢元紋太、房川素生、釜永睡花の三君は十月四日京都川柳社の大會に出席され、散會直ちに上京されたさうで東都から寄せ書きがありました。紋太君からは十日本社の月評會、十八日の川柳松茸狩へも出席すると云つて來られました。近來めざましい活動振りをよろこんでゐます。

▼河野夜王君（元本社の社友）は蟷螂吟社を創立されて十月十一日夜鐘紡倶樂部で創立

捨兒でもしてやらそうな風が吹く　むら子

評、秋の風は哭き、冬の風憑る。

（地）

捨兒せん爲　初着縫ひしぞ　いわを

評、糸切歯かち〳〵鳴らして。

白狀

◇　鮎美選

白狀の素直さ丈けは認められ　鐘生
酒合を云ふて白狀强ひられる　吐句坊
ごうしても白狀をせぬ脊を蹴り　佐保蘭
白狀しながら寂しく死んでゆき　正路
白狀の今はつきりと父の顔　八歩
白狀をして家附へ小さく居る　苦茶坊
親しみを感じ白狀してしまひ　白柳子
白狀をして笑ひあふ仲のよさ　柳仙
白狀へ盃持つて皆が攻め　蘭山
白狀は我が身が可愛い手をあはせ　一枝
白狀に刑事うなづくばかりなり　沒食子
白狀をせぬ留置場月がさし　青兒
白狀を父はだまつて聞くばかり　小柳子
白狀のせつなさ飯をすゝめられ　正司
惡友が來て白狀にしてしまひ　有爲郎
佗びてから白狀をする如才なさ　利生
捨鉢もあつて白狀してしまひ　掉二
白狀へ女笑つて居るばかり　三碧
お光りを上げて白狀こわがらせ　木馬
白狀を素直にされてものさびし　一正
情實ものこらず白狀してしまひ　葉光
白狀へ未だ妄想の斷ち切れず　無人

（天）

石段は捨兒があつてから淋し　青兒

評、その一枚に夜泣石の名。

軸

踏ン張りて泣きしきる兒を捨ふ　閑生

水谷鮎美
楊井二郎　共選

白狀をして兩方からうこまれる　鴉天
白狀を迫ればたゞに泣くばかり　ひさし
白狀をしてから飯のうまいこと　琴風
白狀に姐御らしくも見へて來て　愛緒
世の中を呪ひつくして白狀し　白花子
白狀をせぬ惡友とのんで醉ひ　春秋
白狀をして三面を賑はせる　一笑
白狀をさせていさゝか酒の味　眠舍
こゝだけでする白狀をみなにする　明珠
虐待へ白狀意地をはり續け　紅菊路
義理ゆへに白狀するも女にて　卯三
白狀もせずにスパイが舌を嚙み　民郎
白狀にのろけもあつてさびしがり　摩耶火
白狀をせぬ決心は眼で笑ひ　新水
白狀はします電燈眩しくて　湧三
白狀はさせてはみたがおさまらず　憲坊
良心が白狀せよと呼びかける　吉綾堂
丼を食つてあきれるほど自白　水車
言ひ甲斐もなく買收へ白狀し　錦石
白狀の夢へ追手の迫るなり　欵乃
白狀の空々しくも夜がしらみ　白扇
白狀のしきれず女の蒼い顔　柳馬

句會を催されましたので本社から朝田新水君と私が出席致しました。

▼森雞牛子君は九月十六日九州八幡方面へ行つて柳友と大いに語られたそうです、同十九日同居の郷里の黑部峽谷から宇奈月溫泉へ行つて深み行く秋を味つて來られたそうです。

▼太田誼子さんは光纏抄でふるつてゐる方ですが八月上旬目出度結婚されて大瀧文子と改姓され名古屋へ移られました。

▼芦城川柳社では五周紀念大會を十月十七日午後一時から石川縣小松屋町兼六館で催すので小松支部の上野錦水君から是非出席を私にうながして來ましたが社務多忙のため遺憾ながら出席が出來ませんでした。

▼醍醐川柳社では創立紀念大會を十月十八日午後二時から一宮市人形町吉田柳長子君の宅で催されました。

▼杉村銀花君は十月二十一日夜永眠されました、哀悼の意を表します。

▼立井登美坊君から寄せ書、保月、連樂、柳如笑鬼、新朗、白洋、醍醐川柳社からの寄せ書柳長子萬狂亭、三ッ石平蓬、井蛙、長有美、染太郎、紫川その他。

▼本號の編輯は路郎先生、山雨樓、町二、愚陀杏三の諸君と私とで致しました。

轉居

▼岩崎柳路君は（撫順東二條通五八へ）▼立

今更に白狀なぞと酒を飲み　里十九
白狀をさすのも乳母の力にて　同
インキ壺へ白狀をする手がふるへ　柳路
白狀をしてきた顏の留置場　同
白狀を迫る證據に眼をつむり　耕民
元兇のさすが重みのある自白　同
白狀へ六法全書控へたり　奇可愛
弟が先きに白狀してしまひ　同
白狀の灯へ秋虫の二つ三つ　比呂詩
白狀のページをめくる音さびし　同

佳吟

腕を組み友の白狀聞いてゐる　壽惠兒
白狀へ燃へる眸は迫つて來　黑天子
白狀の右も左も金鉛　いわを
零落れたまゝ白狀の吃るなり　民郎
白狀をじつと聞いてる酒の冷へ　里魚
白狀へむせび泣いてる母を見よ　坊茄子
すつかりと白狀をして眠るなり　四五磨
白狀を精神異狀にしてしまひ　水車
白狀の前に襖はしめられる　變人
白狀のあと水すまし舞ふてゐる　夜王
白狀をしてから手荒に扱はれ　艸樂
さも味方らしく白狀させるなり　喜由
白狀のあとの輕さの陽の光り　沐天
白狀して肩をさびしく落したり　玄絃堂
白狀をする横顏へ五十燭　勝二

（人）

白狀をしてるにむちを振り上げる　湖山
白狀を聞けば生活難の由　泉流
白狀をさせに二階へ母は立ち　義郎

（地）

神妙にして白狀の聲ひくし　方眠
白狀をせよとホトトギスが啼いた　洋々

（天）

白狀のあとへ冷めたさだけ殘り　勝二

◇　二　南選

白狀をしたのに首を馘られて居　靜太
白狀の中途制裁思ひ出し　鴉天
けいべつの瞳の中へ自白する　勝二
白狀の前に襖はしめられる　變人
白狀をさせて刑事は書にする　里魚
義理ゆえに白狀するも女にて　菊路
白狀へ盜つたお菓子を增してゃ　欵乃
惡友のする白狀は惚氣じみ　玉成
白狀をさせてまゝ親物足らず　耕民
さも味方らしう白狀させるなり　喜由
白狀を有耶無耶にして事が濟み　むら子
仲裁へ白狀し合つた手を握り　柳路
ほめられて犯人の出る幼稚園　光
丼を食つて呆れるほど自白　玄絃堂
白狀をして青い青い空を見る　かずま
白狀をせぬ決心は眼で笑ひ　摩耶火
白狀に親はやつぱり親だつた　小柳子
別々な白狀を持つ女給なり　四五磨
白狀をすれば悲しいことばかり　明珠
約束があり白狀を叱られず　琴風
救援の金主へみんなぶちまける　白帝子
白狀へ盃持つて皆が攻め　蘭山
滿廷を泣かして貪の罪を述べ　艸樂
何もかも喋つて子供手柄顏　憲坊

井登美坊君は（泰天琴平町七）▼（食滿南北君は（住吉町二七九）▼佐々木三福君は（大連市文化臺七一八）

新誌友

（六年十月十八日まで）

「川柳雜誌」前半分金壹圓八十錢以上拂込の讀者を誌友として、こゝに芳名を揭載します何卒此際新讀者を御勸誘下されて樣御願ひ申します。御紹介下される方には「川柳雜誌」の近刊を見本として差上げますからお申込み下さい。（綠雨）

長谷川富雄（伊藤愚陀）河盛光雄（麻生路郎）
三井俊雄（村松夢裡）
片山雲雀、大野了念、三井伊之吉、桂閑々坊
中西おさむ、前田幽光、大瀧文子、藏多馨、
三浦秋無草、石曾根民郎、和田一郎、伊豫田登喜治、山本秋次郎、北川あやみ、松並光哉、村野健雄、上村村樂、越中今雨、鍛永斛平、駒田白帝子、佐々木鳳石（本社事務所）

括弧内は紹介者

前月號正誤

三十九頁　腹貸したとは　女無責任　柳秀
四十二頁　合掌の瞳うつせば讃岐ふじ　吟女
四十六頁　けろりんと眞晝に嘘を言ふのけて　夜王

白狀をさせに待つ眸こ知らぬなり　民郎
白狀のそれから先は涙聲　一枝
白狀をさせりや羨ましい話　鐘生
白狀の素直さだけは認められ　同
愛してる事を白狀眞面目なり　木馬
合槌に釣られ白狀してしまひ　同
本當の事を聞かせて眞顏でる　樹光
白狀をする氣で藝者飲み直し　同
白狀をせぬ惡友このんで醉ひ　春秋
恐れ入りましたこ貧のぬすみなり　同
母親へ白狀をする女の子　同
白狀をさゝれる酒こ知らず飲み　沒食子
ヂャズバンド自首の決心にぶらぶる　同
腹立ちにさて白狀はしたものゝ　同
眞先に信用あるのが白狀し　同
生來の吃で白狀さゝれてる　同

（以下第二席）

白狀を郵便でする氣の弱さ　むら子
うなづいて見せて白狀恥づかしく　一正
白狀をして拐帶のやせが見え　英賀夫
口輕い白狀にして憎めない　蘭山
ほんこうの白狀聲が低うなり　苦茶坊
白狀をしてから女氣がかはり　明
零落れたまゝ白狀の吃るなり　民郎
白狀に惚氣もあつてさびしがり　同
親しみを感じ白狀してしまひ　白柳子
まだ一つ足りぬ白狀笑つて居　同
白狀をしやうこすれば電車が來　明珠
白狀をしてから景色ほめるなり　同
白狀をぢつこ聞いてる酒の冷え　里魚
白狀を聞いた後妻の瞳が潤み　同
白狀をする横顏へ五十燭　勝二
白狀をせぬ强情をくすぐられ　同

（以下第一席）

明らかに白狀をする座談會　葉光
齒のぬけた夢白狀をするこきめ　方眠
白狀をする氣未練の日が續き　沐天
白狀こ知つたビールの栓をぬき　民郎
白狀をさせて火種を貰ふなり　同

（以下第一席）

白狀へ他人の事を差しばさみ　いわを
白狀こ別な氣持もあるマダム　民郎
先生に言へば良かつた胸さわぎ　一枝
白狀を恐がつてゐて妻を責め　凡平
白狀をして內緣の妻を呼び　三碧
（軸）白狀へ嫂の顏歪んでる　二南

辰巳籬風集

（序文）麻生路郎、佐々木信綱
安江不空、相馬御風、岡野
眞七郎の諸氏で

四六版　百五〇頁
定價　壹圓三十二錢（送料共）

大和畝傍山東南麓
發行所　桑風莊

同　釣瓶井戸櫛を落して來る眞晝　民郎
五十四頁　世を拗れて背中のいる賊の晝　丹路
同　衛生の觀念もなく世帶じみ　丹路
同　元祖の軒に抱かれた戸主　丹路

讀者便り

京　生

十月四日待ちに待つた路郎先生來洛、僕が川柳を知つて京へ先生が來られたのを見たのは初めてです。水府が一人京をおさへていました而し僕等の若い憂鬱はもう、啞亭や南北を京へ入れません、いや京でのさばらしはしません。先生や紋太氏初めて御目にかゝれたうれしさで一ぱいです。京進出を待つています。句の上手な京郎氏も來ていられました、珍らしい事でした。

募集懸賞川柳

題「結婚」

十一月十日締切

その他雜吟を募る

▼用紙　官製ハガキ（化粧伽壇こ明記の事）

▼秀逸數句に薄謝を呈す

▼大阪市西成區千本通五丁目七番地
麻生路郎氏宛

化粧新聞社

柳川 日待及び月待（三）

藤里好古

凡日待之遊戯、高貴家有二管絃拍子、十炷香、競馬香、貝合、雙陸、圍碁、將棋等遊樂、或詩歌、連歌、加留多、十種茶、十種酒或謠謳、舞曲、琵琶法師、平家談等之逸興一—日次記事一—

とあり。「二水記」には禁中お日待に御連歌ある事を叙し、「實隆公記」は月待に茶之湯の興行ある由を記し、「言繼卿記」には月待に中御門家於ては田樂にて一盞ありし趣きの記載あるなど、特權階級者間に於ても行法よりも逸遊に重きを置きたるが如し、況や、民間に於てをや

若二民間一、則淨瑠璃、説經(節)、狂言、歌念佛、三味線、一節切（尺八）、淨土雙陸、加留多、枕引、手相撲、頭引、腕推、髓推、居相撲、力持、福引、賦引、或繫二繩於兩人之脚一而互引レ之是謂二透逃子一凡百般戯樂無レ不爲レ之。—日次記事一—

と種々遊樂にのみ没頭して、日待本來の行法の如きはそっちのけの有樣であつた。然して其等の遊びが如何にくだらむものであつたかは

伶人は日待にいけぬ役者なり

の句が語つて居り、役者とても又

後足を呼んで日待に落を取り

竹槍や鷺澤が寄る日待の夜

と云ふが如き、つまらぬ者共であつた。そして

日待の夜乳母は飯にてぶっさらい

引白のいつくらも寄る安日待

の如く無藝大食の一座もあつた。中には靜かであると見れば

百の貸それ覺へてか日待の夜

日待の夜馬鹿と蛮とが殘る也

との如く不埒にも博奕を打つてゐる連中もあり。亦女を口説たり、關係付けたりして居る者もあつた。

手放で日待へ貸すがマア油斷

で、大切な愛娘を玩物にせられて悔恨の淵に沈む者も少なくはなかつた。蜀山人の「鰐の味噌津」の中に「三味線」と題した

一話がある。

「おすめごの三味線は、きついものでござる、晩にさるおやしきに日待があるが、やらつしやらぬか」といへば、ふた親「イエ〳〵ごういたして、まだそれほどに參りませう、やう〳〵このごろ二三段ほかはあげませぬ。それに聲はたちませず」といへば「ちつともくるしうないこと、當世はまづ一ころび二聲と申ます」

とあり。然して日待の晩にころんだ娘はどうなるか？。

お妾は日待の晩に見た女

の句が解決してゐる。此夜の淫風の漲れることはアブナ繪や四ツ目屋の御用物の横行する時世であり、中條の繁榮を見る時代としては當然なことでもあつた。

日待の大きい役で嫁はにげ

と堅氣な女は藝廻しなどが始まつてそろ〳〵、座が崩れる頃には姿を消すが常であつた。

村日待膳が取れると聲女を出し

この安全策を弄する向きもあつたが、要するに日待月待の夜は亂癡氣騒に終るが習ひであつた。

村日待藥鑵の蓋を明日辱れ

昨晩の日待の禮に來る草履

下駄片し持つて日待の禮ながら

と恒に川柳子に皮肉られてゐる。「東都歳事記三」に依れば、かゝる罪惡の震源地たる日待又は月待が修せらるゝ處は、築地の海手、深川洲崎、湯嶋天滿宮境内、日暮里諏訪社邊、目白不動尊境内、飯田町九段坂、芝高輪、品川等であつた。

六尊の彌陀を生醉拜むなり

飛んだこと彌陀來迎物日なり

の句は此夜品川遊廓の繁昌を叙するものである。

元來、日待並に月待の修せらるゝ「神足月」たる、正五九月は「八戒齋」を受持する時季なることはすでに說いた。が、此時季に「八戒齋」中最も嚴重に持戒すべきは「不過中食戒」であつて、非時の食を喰ふを禁ずるの戒であれ。然るに「月待」「日待」の席上にて亂飲暴食し、種々惡業を作すは大いに齋會の主旨に反するものがある。故に古來識者は口を極めて「月待」「日待」の不德にして、安寧秩序を亂るものなりとて、訓ゆる處があり。貝原益軒は

月待、日待に大酒小歌三味線にて、遊び夜を明す人あり。御月樣御日樣をおのれが大皷もちにするものかと、大笑ひせられ待りぬ

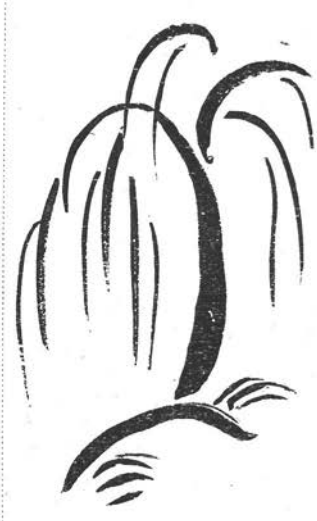
と「町人囊」四に話され德川光圀卿は

月待日待は、輕き者のわきて仕まじき事也、殊更世俗の月待日待といふは、盲女座頭をよび、遊興を催し、あるひは博奕など仕るよし、非禮至極に思召候に付、月待日待無用に致すべし、强て念じ度存候はゞ外に念じやう有べき事と被仰候

とて水戸藩は是を禁ぜる由「桃源遺事」にあり。明治維新の原動力は水戸學の勃興にあり。明治初年の神佛分離の運動も亦水戸學に由來す、されば常に同學派の人々に嫌惡せられ來つた「月待」「日待」の習俗は、舊物一新の際後形もなく根絶されてしまつたのである。—三一、八、一七、九州行發向の際稿—

各地柳壇

＝いのちある句を創れ＝



本社十月句會

於端の坊

十月三日　午後から絶間なく降り出した雨を衝いて、作句道場端の坊へと集つた川柳詩人達は、仲秋の一夜をなごやかな緊張に過した。路郎先生は兼題披講の後、美粧院は思つたよりよい句があつたのは喜ばしい。題がやゝむづかしかつたので如何かと思つたが、豫想以上の成績であつた。だがいつものこと乍ら類句は免かれず、今度も多かつたやうだ、とてその數例を擧げられ、續いて題吟の際には題に捉はれるのは素より避ければならぬが、さりとて餘りに極端に題意から離れることは面白くない。つかず離れずの境地が望ましい、とてその例を擧げて説明あり、續いて所謂動く句について戒められた。最後に互選披講について注意と希望を述べられた。杏三、山雨樓兩氏亦選後感を述べて、意義ある一夜を終つたが、この夜山雨樓氏は再び「川柳を規則づくめにせうと云ふのではありません。只川柳をよりよくしたいために、川柳家を敬愛したいために、十本の幟を立てゝ見た」と前提して川柳十則なる印刷物を一同に配布された。十則とは、作らうとする意志、裸体になる用意、詩に飢へること、推敲とたんれん、目高手低名句の洗禮、川柳遊蕩兒となる勿れ、批評を盛にせよ、川柳の闘士たれ、川柳を永續せよであつて各項に氏一流の輕妙達意の説明（主張）があつて、いつも乍ら川柳愛に燃える氏の熱情の表れとして、一同敬意を表した。

（町二記）

（出席者）

路郎先生、綠雨、公二、夜王、村樂、緩勾配、鮎美、坊茄子、豆秋、素月、みつる、三碧、夢裡、曲豆、貞雄、柳甫、杏三、裸人、白柳子、里十九、おさむ、水車、かほる、あや美、機見女、小柳子、鶴峰、艸樂、雅幽、白峯、吉一、岩雄、月下、柳仙、とも坊、陽喜亭、新水、無鬼、默平、愚陀、琴人、山雨樓、夕鐘、光男、町二

兼題　美粧院　路郎選

美粧院通ひに有らぬ噂なり　奇可愛
美粧院奥に老婆が小さくゐる　方眠
美粧院號外で櫛を拭いてる美粧院　豆秋
美粧院まだそれ程に儲けてず　白柳子
美粧院金と暇の美くしさ　いわを
髮を結ぶだけが全部ちやありませぬ　あやみ
美粧院出てから足を眺められ　慈雨來
自家用が一臺停まる美粧院　白峯
年上の意識が通ふ美粧院　默平
美粧院へ行く程でない今日の會　三碧
美粧院滿足さうな聲で去に　曲豆
美粧院雜誌屋程も並べたて　水車
美粧院さきの亭主を思ひゐる　里十九
美粧院ママサンと云ふ子を待たし　山雨樓
美粧院儲けてゐます女史にして　陽喜亭
美粧院夫あるやらないのやら　同
美粧院ほくろの藥などきかれ　緩勾配
長二郎のことでもめてる美粧院　同
不足も言へて美粧院の朝にゐる　柳仙
其の首にして其の形の美粧院　同
笑つても見たい氣でゐる美粧院　村樂
美粧院何うやら自信とり戻し　同
顏の中心を失つて美粧院を出る　杏三
美粧院時間がかゝるので好かれ　同
（人）美粧院子のある事を忘れて出　柳甫
（地）美粧院好い奥樣にして返し　同
かほる

(天)美粧院違つた人に作り上げ　光男
(軸)奥さんの鼻には困る美粧院　路郎

席題　ポスター　杏　三選

ポスターも出す氣同人揃ふなり　かほる
ポスターにビールの泡が盛り上り　琴人
ポスターは味覺の秋をそゝる也　鮎美
ポスターの裸婦よな〳〵の手をのし　裸人
ポスターを裏返して松茸うどん　里十九
背伸びしたところポスターれたさがり　柳仙
ポスターへ憂國の士が少なすぎ　緩勾配
日延べしたポスターへたな字で書かれ　月下
ポスターの萬と云ふ字も効目なし　雅幽
ポスターへ閑な店から灯がとゞき　同
ポスターの美人疲れた目へ笑ひ　默平
自宅への分をポスター捻いて臭れ　同
捕手の繪を書いて野球のある知らせ　公二
ポスターに黴菌みせてゐる醫者　同
ポスターへ候補者の顔が慌てゝる　艸樂
ポスターの並んだ辯士にかけ値あり　同
ポスターの色あせて來て秋深し　夕鐘
(佳)降るまでの風にポスター舞上り　同
(佳)ポスターの巡査やつは肩を張り　坊
(佳)ポスターの未だ開通して居らず　新水
(佳)ポスターは金を使へと書いてな　山雨樓
(佳)ぜひ一票女に用のないポスター　陽喜亭

席題　晩酌　かほる　選

晩酌へ隣の女房あがりこみ　雅幽
晩酌は醤油を出す音を聞き　山雨樓
晩酌へ隣は茶碗洗ふ音　豆秋
寄合へ出るので晩酌手びかへる　三碧
晩酌の父はうなづくばかりなり　おさむ
晩酌から夫婦らしくなつてゐる　默平
晩酌は炭を立てたりこかしたり　同
晩酌へ又下女は笑ひこけ　艸樂
晩酌の相手欲しさうな父の顔　夢裡
晩酌の鰯を子供たべたがり　裸人
晩酌の一口で知る今日の事　村樂
晩酌へふすまを閉める姉となり　柳甫
晩酌へ別れに友がやつて來る　鮎美
晩酌の雨なら雨の樣に飲み　新水
もう一本つける晩酌仲がよし　琴人
晩酌は子に蓄音器がけさせる　夜王
晩酌の機嫌夜店へ子と出かけ　陽喜亭
晩酌へ丁度ラヂオは安來節　同
珍客に晩酌つめとうなつてゐる　夕鐘
晩酌へれむとうなつた子がひとり　同
晩酌は夜勤の娘案じられ　白柳子
晩酌に昨夜の醉を笑はれる　同

席題　車輪　山雨樓　選

車輪の音に欠伸がゆがむ　愚陀
脱稿にならず車輪の響く夜　默平
ブレーキがきかぬ心の車輪にて　夜王
これからは車輪のやうに生きて行かう　白峯
カンテラへ車輪の一部だけ光り　白柳子
旗振つて車輪の音が好きと云ふ　陽喜亭
車輪ころ〳〵稻が實がいる　村樂
阿部野へ〳〵車輪がつゞく　豆秋
嘶きを殘し車輪のきしる音　夢裡
蘇生した如く車輪は動き出し　緩勾配
車輪今故郷に近い音になり　三碧
車輪の中の玉を悟らむ　鶴峰
西陽まばゆく車輪を磨く　新水
車輪には疲れも見せず發車する　みつる
踏切に車輪はつきり怖しい　琴人
スピードの車輪に秋をまつしぐら　鮎美
裁かるゝ日の車輪にもおのゝけり　同
(人)ぬかるみへ車輪與奮つてるなり　柳甫
(地)秋の山に副ふて車輪のこゝろよし　雅幽
(天)秋晴れの車輪も稼ぐものに見え　同
(軸)車輪の音が濁れば さびし　山雨樓

席題　割　箸　鮎　美　選

箸割つてからもお世辭が續くなり　夜王
割箸へ發車時刻が近くなり　裸人
出發の夜は割箸のものを食べ　白柳子
割箸の消毒濟徽のが生え　艸樂
兎も角も割箸だけは割つて置き　おさむ
うどん箸割つて不平がまだ續き　素月
割箸の子供の口をあぶながり　小柳子
空腹へ割箸の音高いなり　吉一
割箸で食ふ譜新塲の味をほめ　陽喜亭
割箸の先で教へるいゝ景色　同
(佳)割箸の輕りなさが身にこたへ　光男
(佳)割箸もコツプも一つだけになり　白峯
(佳)割箸を靜かわれば秋の音　山雨樓
(佳)割箸は贊成といふ音になり　村樂
(佳)割箸の嬉しく俺の氣へ割れる　無鬼
(人)奥樣のすゝめ上手に箸を割り　公二
(地)ぜんざいを煮き割箸が足らぬなり　かほる
(天)割箸に松茸山の煙ること　山雨樓
(軸)割箸にこゝろを割つて別れけり　鮎美

席題　階級　互選

階級を忘れ課長とさし向ひ　光男
若様と下女眞面目な戀であり　艸樂
階級にもう甘んじて宵寢なり　月下
二等車のデッキへ立つて叱られる　白柳子
階級を考へ足のツメを切り　かほる
ある階級の怒りと見ゆる空の煙　三碧
ドア開けてえらい人から順に降り　豆秋
祭られる身にも階級別があり　無鬼
階級が極めた心の贈物　夢裡
階級が違ふ便所のペンキ塗り　雅幽
階級をはつきり社宅立ち並び　夜王
階級がちがひ年より老けて見え　裸人
階級をはつきりみせてすはつて居　綠雨
階級へ父と子が競つてゐる　坊茄子
ステッキを持つて階級意識する　小柳子
階級を知つてか子供をほしがらず　機見女
階級の露骨にパンの事を云ひ　鮎美
階級のもの憂き膝を立てゝゐる　同
祝賀會まだ階級のとれ切らず　素月
小學を出て階級を意識する　同
階級に慣れでハンマー差なし　緩勾配
階級の通りにガーム育つなり　同
階級をハッキリ分ける捧げ銃　水車
階級を吐き出してゐる朝の驛　同
階級が敬禮ばかりさせるなり　公二
別莊へ子は階級も知らず行く　同
節高い指に階級みせてゐる　同
階級を論じ鐵筆離すなり　柳甫
資本論へ朝からパットのみづゞけ　同

階級へ半端に生れペンを持ち　同

川柳雜誌社　**梅田支部小集**（大阪）

題小川　川村觀月　かほる選　報

月丸う小川のほとり笛を吹く　卜居
水車番小川づたひに行けと云ひ　坊茄子
赤とんぼ小川に沿ふて飛んでゆく　觀月
お座敷は小川半分取りこんで　里十九
小川からざるを呼び兄を呼び　同
愛人と小川を越えて足を拭き　鮎美
ちよろ〳〵と小川の水へ目高ゐる　方眠
秋深し小川の水も澄んでゐる　同
（人）鐵橋の音が小川にまで響き　鮎美
（地）丘からも小川が光るうらら　同
（天）水清く小川は砂が流れてゐ　方眠

題セル　かほる選

伯母さんの遺品のセルが似合ひ　卜居
數島を吸ふてセル着て素足なり　觀月
カルピスの味にうれしくセルを着て　同
朝詣りセル着のあの妓に出會ひ　里十九
戀人の肌もさら〳〵セルの頃　夕鐘
桃割に結ふて見たいもセルの頃　鮎美
姉妹のセルの袂が揃ふなり　方眠
セルを着て散歩をすれば虫の聲　同
（人）セルを着て此頃ずつと大人ぶり　同
（地）すらりつてしセルの娘の色白し　同
（天）お彼岸の歸りにセルをねだるなり　いわを
（軸）夫のと息子のセルを今年買ひ　かほる
（同）縫物屋お師匠もセルになり　同

題微笑　新水選

戀心微笑へ頰を染めるなり　坊茄子
うちあけし朝の微笑に口すゝぐ　卜居
微笑んだ顏へ土產の解かれゆく　夕鐘
微笑んだ母の額のしわを見る　觀月
微笑みをりせて女はうしろ向き　里十九
微笑んだだけで恩人通りすぎ　同
微笑みのやがては戀に克つならん　鮎美
愛人の微笑みたるがふとさびし　同
（佳）魂を微笑む途に櫻咲く　同
（同）灰色の空氣のなかに微笑みぬ　觀月
（同）必勝を期す微笑なり餘裕あり　方眠
（同）その微笑えてぼけはつり撮れゐる　同
（軸）心臟へ泌む微笑とは思はざる　新水

阪大川柳會九月例會（大阪）

兼題夜　丸島利生　路郎選　報

魔にもよし戀にもよろし春の夜　雁
ナイトクラブに君臨したる未亡人　同
失職を夜店の香具師に見すかされ　橙舍
夜を云ふカムフラージュで借りに來る　同
ハーモニカ都會の夜はふるへてる　路生
夜河を渡れば甲斐の風が吹き　同
戎橋更けてぶざまな媚があり　湧三
人を轢いた夜汽車で着いた町の朝　五孔
丸髷が口を開けてる夜の汽車　同
何となう蒸す夜に友はみまかれり　斗仙
何も彼も忘れたやうに灯がともり　竹涯
のんだくれ宵の積りが明けて居り　吉三郎
主婦の友膝にかぶせて夜深し　双・山

いゝ月夜戀のないのを寂しがり　柳秀
夜遊びのドーシタことか土産買ひ　同
どこまでも月は夜逃げの後を追ひ　同
(人)寝る頃になれば隣で三味をひき　竹涯
(地)夕涼みの間を縫つて往診に　與郎
(天)ドンファンはまだ今晩を待つてゐる　湧三

素生居偶會（神戸）

九月二十二日　西村明珠報

帳簿

ほつとする量の帳簿に子のいびき　明珠
よれ子
するすると書いた帳簿に損がなし　春秋
月末の赤字へあてる吸取紙　華水
帳簿から退社時刻の音になり　同
呼鈴へ帳簿をしめる音で立ち　同
間違ひのない出納簿音をさせ　素生
その返事帳簿をとじてからにする　同

川柳雑誌社神戸支部

部友小集（神戸）

八月二十八日　於華水居　西村明珠報

兼題　沈　默　竹　風　選

沈默の男へ聞けば只笑らひ　繁堂
沈默のその顏色に不平あり　笹舟
(人)この思ひ只沈默もしておれず　明珠
(地)沈默の今は泣きたくなつてゐる　春秋
(天)沈默を續けてゐたい悲しい日　明珠
(軸)沈默の眉字に決意が浮いてゐる　竹風

席題　美　術　華　水　選

美術家と言はれ近處と遠く生き　笹舟
落選の悲哀も美術家の秋　春秋
古美術を語たる男に金があり　明珠
(人)美術品共鳴出來る妻の居る　鬼笑太
(地)美術家の顏にうつた舞妓の目　明珠
(天)麗人の肩が揃ふた美術展　竹風
(軸)兄さんの美術を信じ嫁に行き　華水

席題　條　件　明　珠　選

條件を附けて惡友誘ふてゐ　華水
條件の一つ一つが癖の種　笹舟
條件へ煙草のけむりふかすなり　春秋
(佳)條件のある金策がやつと出來　鬼笑太
(佳)條件を付けて小犬がもらはれる　笹舟
(軸)條件がまだあり貸してゐる身には　明珠

席題　壺　春　秋　選

あきらめてゐたのに形見の壺が出る　明珠
姉さんの白粉壺がちとふるい　繁堂
壺ばかり集めて變人らしく居る　鬼笑太
壺持つたモデルへ午後の陽が當たり　笹舟
出戻りの姉に壺が光つてゐ　華水
(人)骨壺をぢつとみつめて出る涙　明珠
(地)インキ壺ペンを信じ切つてゐる　華水
(天)病院の隅に唾壺キチントゐ　竹風
(軸)吐月峯をぽんと叩いた思ふ壺　春秋

席題　筆　互　選

達筆のおどけたうそへいゝ返事　鬼笑太
尋常科ハトハナと書く太い筆　春秋
筆入れに穗先が曲つたまゝ二本　竹風
筆無精いつも同んなじ詫を云ひ　華水

九月九日　於春秋居小集

兼題　グロテスク　華　水　選

紅うせた欠伸の聲のグロテスク　鬼笑太
監守一人博物館の夜は更け　竹風
常食の蛇へギョロ〳〵眼が光り　春秋
魚眼寫眞スターの顏もグロテスク　笹舟
(軸)骸骨をもつて生蕃氣嫌よし　華水

席題　立　明　珠　選

喝采を眞に受けて居る立候補　繁堂
立話ふひに驚ろく撒水車　笹舟
吸殼をすてゝ別れた立話　華水
無茶苦茶に交番所から腹が立ち　春秋
(佳)投資りを巡査も立つて聞いてゐる　竹風

席題　手　春　秋　選

君の手をかりればなどゝ惡友來　鬼笑太
諏訪山へ幼稚園は手をつなぎ　笹舟
抱いた子の手が吊革へ延びたがり　竹風
木影からお手手つないでもれてくる　華水
(人)やゝい手附きで手品よくだまし　竹風
(地)擧げ手にタクシー眞直ぐ來てまり　同
(天)手を變へて見ても催促されるなり　明珠

席題　手　繁　堂　選

君の手をかりればなどゝ惡友來　鬼笑太
握手する坐頭へレンズ向けられる　明珠
一人身の巡査手袋洗つてゐ　笹舟
抱いた子の手が吊革へ延びたがり　竹風
(佳)手が二本ちつて無器用に生れてる　華水

席題　喧　嘩　竹　風　選

子を連れて喧嘩の渦の外へ出る　明珠
口喧嘩新參者は聞いてゐる　華水
電話口喧嘩に負けた方が切り　同

席題　喧　嘩　鬼　笑　太　選

一人兒が泣いて喧嘩の聲もおち　笹舟
子を連れて喧嘩の渦の外へ出る　明珠

見て來た喧嘩を派手に聞かしてる　竹風
若且那大喧嘩から遠くゐる　華水
（佳）喧嘩する迄を仲よくのんでゐる　春秋
（住）喧嘩してみても吾が子だ吾が父だ　明球

席題　喧嘩　笹舟　選

子を連れて喧嘩の渦の外へ出る　明球
喧嘩したきすを言はない勝氣な子　鬼笑太
（秀）喧嘩して見て、吾が子だ吾が父だ　明球

席題　おそい　互選

宴會におくれて皆に覺えられ　繁堂
遲く來て酒になつてる聲を聲き　竹風
面白い事を見て來た遲刻なり　明球
一足の違ひ社長の尻を見る　笹舟
親しさは遲く來たのにおごらせる　華水
電報を握つておそひ汽車にのり　春秋
少しおくれて噂の中へやつて來る　春秋

ひかり集 —その四—（大阪）

水谷鮎美報

光り

蓮の葉の露の光りに起き出でむ　ト居
撒水のまばゆき光り仲仕くる　同
南京玉の光り童心よみがへり　同
陽光をあびてスポーツマン踊る　觀月
錢かと思ふ光りに見へる　同
月まろく海の彼方の波光る　同
休息の土工へ屋根が光るなり　同
湯槽きら〳〵晝の髭剃り　鮎美
啞の子のみつめし窓に陽が光る　同
幸福の光りまばゆき中に生き　同
溪一つ越へてひかりし道をゆく　同

川柳雜誌社鶴町支部

九月例會々報（大阪）

九月十九日午後六時永川秋月居に於て

妹尾變人報

兼題　意氣　琴人選

その意氣に女の方が惚れて居る　變人
意氣もなく希望も捨てた橋の上　岩石
あの時の意氣を友達ほめてくれ　小柳子
意氣と意氣早慶戰の火花ちる　寛柳
意氣と熱上ぼつてくると中止され　千成
スタートは背一着の意氣であり　秋月
御輿かき意氣が揃へばよくあばれ　紅
決勝點もう一意氣に拔かれたり　碧郎
（佳）意氣地なさ見せて養子はあり　變人
（同）意氣天をつけど俺には母がある　白峯
（同）意氣込んだ財政論に政治論　岩石
（同）引けは取るまいと老人の意氣　山雨樓
（同）その意氣は育て母が知るばかり　稔枝
（同）嬉しさは老ひたる父に意氣のあ　琴人
（軸）その意氣でやれと伯父さん一人醉ひ　紅

兼題　土産　碧郎選

庭へ置く土産で兄の二三日　變人
妻に子に土産を持つて醉ふてゐる　千成
春の野に子は戛く遊ぶ伊勢土産　稔枝
見送りの坊やへ土産約束し　のぶを
親しみな土産長屋へ分けられる　秋月
後戻りして御土産を買つてくる　寛柳
お土産へ子供の數を考える　小柳子
（佳）お土産を中に話しがつゞくなり　岩石
（同）土産物より心の嬉しくて　山雨樓
（同）皆無事の中へ土産はひろげられ　琴人
（同）手土産い柿風呂敷をこぼれ出し　碧郎
（同）母の背に渡つて土産念を押し　寛柳
（人）お土産へ友の嬉好も考える　岩石
（地）土産なぞ要るか自分は自分だけ　稔枝
（天）いとし子へ父の土産の重たすぎ　紅

席題　疑ひ　琴人選

疑ひが晴れてほんとに泣いてゐる　變人
疑ふ乙女へ柳肩を打ち　岩石
親友と行けば疑ふ妻のくせ　白峯
疑ひへ婦は泣いてばかり居る　岩石
疑つた心を笑ふ戀同志　寛柳
隅っこの方で疑がわれてる　小柳子
（佳）疑ひが晴れて淋しくなつて來た　同
（佳）疑がわれ呑めない酒を呑んでる　變人

席題　折角　秋月選

折角の話に母は不服なり　白峯
折角の國の土産が豆であり　稔枝
（佳）折角の玩具に子供眼はさめず　變人
（同）張物をぬらして隣り留守らしい　寛柳
（同）折角に寄れてくれば貸家札　三丁
（同）折角とへば我思意の弱くなり　變人
（同）折角の親切心きらはれる　千成
（軸）珍客が來たに女房が病んでおり　秋月

席題　鏡　互選

失戀へ秋の鏡の冷たすぎ　琴人
鏡臺に母と並んで女の子　變人
さんばつへ行かうと鏡を見　小柳子
獨身の部屋に鏡が光つてる　同
無心の鏡へフト別な顏　岩石
拔毛へ鏡を持つた手がさびし　寛柳

この頃は別な氣持ちで鏡を見　小柳子

席題　遠　盧　互　選

遠慮などしますかいなと久しぶり　三丁
遠慮した自分が後で情なく　しげる
遠慮は座布團折つたまゝで居る　小柳子
小ッさい子小ッさい遠慮知ってゐる　寛柳
遠慮して居るがリンゴへ心散り　岩石
來客へ遠慮させまい肌をぬぎ　同
遠慮なく忠告もする友と友　紅

川柳雜誌社神戸支部　**十月例會**（神戸）

十月十日　於八宮神社　西村明珠報

兼題　豊　年　明　珠　選

豊年へ子供いなご取つて來る　華水
穗は重く垂れて三衞の嫁が來る　不然
豊年の話の中で栗がはれ　文夫
豊年の眞只中を燕號　卯生
豊年へ威勢よく着く村芝居　二南
豊年へ話を急ぐ親同志　挑水
豊年へ賞品を出す宮相撲　主税
豊年へ年期の明ける妓の便り　啞聲
豊年の村へ戻つた不孝者　九葉
（人）豊年へ一人娘は寵に慣れ　春秋
（地）豊年の故郷の空は廣くなし　九葉
（天）棧橋へ祖母豊年の顏で着き　二南

席題　賞　金　旅　雨　選

金は水引のまゝ母に見せ　南耕
賞金をもらひほんとの事が知れ　明珠
賞金と一秒違ふメタル來る　主税
賞金を受ける姿を寫つされる　笹舟
賞金をつけて不孝な子を探がし　同
賞金へ其の表情を僞らず　桃水
賞金へあかるみへ出る戀心　同
賞金のある話から妻のりき　鬼笑太
賞金を考へてゐる社の机　不然
憂鬱な男一等賞をとり　九葉
（佳）賞金へ動く心の淺間しく　啞聲
（佳）賞金をあてに身の恥書かんかす　卯生
（佳）賞金を貰ふ男がやせてゐる　華水
（佳）賞金へ子供心になつてみる　春秋
（佳）賞金をあはれ見越した生活費　卯生
（人）賞金の蔭にかくれたエピソード　桃水
（地）賞金に托す望を笑はれる　不然
（天）賞金へマグネシウムが光るなり　華水

席題　高　架　線　主　税　選

白鶴の灯が泛いてゐる高架線　了念
おばさんのうちが見えてゐる高架線　明珠
高架線神戸の屋根へ茶をこぼし　卯生
どん底のくらしへ暮れる高架線　九葉
高架線夜の神戸が廣ふ見え　不然
高架線その下町の眠れる灯　春秋
見送りが眞下を通る高架線　笹舟
高架線試乘に出ると風があり　柳骨
高架線山を見る目も新らしく　二南
（人）母と倚る窓から高架線が見え　桃水
（地）洋館が今更多い高架線　啞聲
（天）朝寢する神戸と知つた高架線　卯生
（軸）踏切へ來て氣がついた高架線　主税

席題　嘱　望　不　然　選

嘱望の一人娘が胸を病み　笹舟
末ッ子に嘱望かけて共稼ぎ　柳骨
嘱望をされて青年強く生き　文夫
若死にも尙さら人に惜しまれる　卯生
先生は其の天才に望み持ち　南耕
信用をされ大阪の空と生き　九葉
嘱望の女優の眉毛細長し　華水
嘱望をされて我身を考へる　啞聲
借金と別に望をかけられる　同
（客）嘱望へあたりさはらぬ口を利き　二南
（客）身にあまる望みをかけて苦心する　明珠
（客）微笑んだ娘の顏にある深い意味　文夫
（客）嘱望の弟子を涙で破門する　笹舟
（客）天才は嘱望されて都に居　柳骨
（人）嘱望をされてバツト級でゐる　華水
（地）嘱望の書生いかつく本を讀み　主税
（天）惠まれる日を信じ切る束ね髮　桃水
（軸）三男を頼ろうとする父の老ひ　不然

席題　好　評　九　葉　選

好評へ番頭明るく勤めて居　繁堂
好評の渦から拔ける女親　桃水
好評は陰の噂を知らぬなり　啞聲
パトロンはいい評判が氣にかゝり　不然
好評の二字がにぢんだちんどんや　鬼笑太
好評へ見知らぬ人が物を言ひ　繁堂
（佳）好評を參謀本部もてあまし　卯生
（佳）好評をはかなしと落葉見る　春秋
（人）好評へそれから雨の日がつゞく　鬼笑太
（地）好評の雜誌の口繪妻と見る　了念
（天）好評へ定價を替へた特價品　主税

席題　干　渉　二　南　選

干渉をしすぎて一も二もとらず　翠石

干渉を逃れた旅の初枕　桃水
干渉をせぬ眼が怖い二度の母　不然
云ひ過ぎた父は煙草の煙にむせ　九葉
薬瓶その干渉へ無言でゐ　華水
干渉もなしダンサーは戀にあき　卯生
養子として干渉の外にゐる　同
(軸)干渉へ濟んで了つたことにする　二南

席題　臆病　互選

臆病の子に祖母さんがしてしまい　南耕
臆病な心を叱かるひとり言　啞聲
臆病のまゝで家庭を持つてゐる　華水
陽當りで人形と遊んで居るのなり　了念
臆病が窘められる美しさ　不然
怪談の後へ二人で薄團敷く　主税
戀人の臆病を知る歸り道　柳骨
臆病を母が承知でゐてくれる　明珠
押賣りを斷り兼れる若い妻　文夫
臆病な戀嫂に笑はれる　桃水
臆病な男へ毒婦じれてくる　笹舟
試膽會すんで臆病チト喋べり　繁堂
臆病が灯をつけて居るあはて樣　同
臆病なマッチが連れを待つてゐる　二南
胸病んで臆病になつてゐる　卯生
子澤山云ひたい事もよう云はず　同
臆病のいゝえ〳〵といふばかり　春秋
大それた事を臆病思つて見　同

たが、和こやかな十月句會を開く。この日は初めての山雨樓、鮎美氏、毎度御世話になつてゐる、絲雨、かほるの諸氏の御出席を仰ぎ熱心な作句に、時のすぎるを、忘れてゐた。席上山雨樓氏より、兼題「唄」の一句〳〵に、ついて、親しく句評をしていたゞき、これからの作句上に大いに參考になる所ありて、樂しく句會の幕をとぢた。

兼題　唄、歌　山雨樓　選

お炊事も唄に合せて若い妻　紅蔦
なぐさめるつもりの唄へ姉は泣き　伊勢子
喜びを調子外れに唄つてゐ　青鬼
宴會で無口と言ふがよく唄ひ　あざみ
醉ふてゐる小唄に三味はうるた(へ)ん　沙門
高らかに唄つて見たい夜でした　靜太
狂人の唄つてゐる淋しい日　奈緒美
もう妹唄はぬ年になつてくる　綠雨
醉ひどれは唄を唄つて手も動き　飛車
ゆうわくへ女給小唄で逃げてゐる　清坊
珍客へ歌を聞かせてゐる若さ　鮎美
ごまかしのさみしい心唄ふなり　康夫
(客)片言の中にもはつきり桃太郎　梨風
(客)阿母の愚痴を鼻唄茶かすなり　沙門
(客)唄ひつゞけて戀を忘れる　鮎美
(客)仕事場の都々逸外は雨となり　子浪
(客)どこからか風がもてくゝ田植唄　卷巴
(人)おとなしくしてゐて乳母に子守唄　梨風
(地)神棚の掃除しい〳〵唱うてゐ　かほる
(天)鉋屑ためて大工の歌になり　鮎美

兼題　ズボン　鮎美　選

胡坐をばかけとズボンへ氣を利かし　小刀
新調のズボンの輕い朝を出る　あざみ
長ズボン初めてはいた歩きぶり　靜太
泌々とズボンの鍬のさみしき日　晴夫
新調のズボンに靴も氣にかゝり　たき女
膝の出たズボン無口の男なり　青鬼
屈托のズボン塵にゴミがある　康夫
先輩を訪れてズボンしわになり　綠雨
青年のズボンのしわが目立つなり　紅蔦
(佳)折目正しいズボンも淋し一人者　同
(同)ズボンだけでなぜ主人の子とほたへ　奈緒美
(同)手の空た床屋ズボンが氣に掛かる　同
(同)失職の壁にズボンがたれてゐる　沙門
(同)死線を越しよれ〳〵のズボンよ　同
(人)盛場をラッパズボンが風と切り　伊勢子
(地)よごれてズボンへ希望のある身なり　康夫
(天)さびしさはズボンに銅貨鳴つてゐる　鮎美
(軸)セーラーのチャーレストンへ櫻咲く

席題　散歩　綠雨　選

そこまでの散歩に妻は塗つてでる　沙門
散歩して寢こぶ首へ蟻が來る　山雨樓
知つてゐる女給に散歩ひつぱられ　かほる
春の丘散歩は光る道をゆく　鮎美
散歩とは口實今夜も飲みあるき　卷巴
(佳)ころんで來たマリを散歩は投げて　かほる
(同)早起きが三日續いた散歩なり　卷巴
(同)散歩から歸るとゆすり來た話　青鬼
(同)散歩から歸ればお湯がたぎつて　奈緒美
(同)滿洲の平野を思ひ散歩する　山雨樓
(軸)下駄と足袋汚し散歩は戻つて來　綠雨

席題　暗闇　かほる　選

暗闇は村から村へつゞく道　卷巴

川柳雜誌社　螢ケ池支部句會（大阪）

十月十一日　茨木奈緒美報

氣候の急變のため、集まる同志は少くなかつ

暗闇にゆれるスヽキがこわくなり　伊勢子
暗闇の花火大手を振つて散り　小刀
淋しくなつて巡査暗闇走りぬけ　奈緒美
暗闇になつて火鉢の火が光り　飛車
暗闇にすひ寄せられた人集り　子涙
暗闇の中に幼き日の幻影　青鬼
暗闇に二人思はず手を握り　沙門
暗闇を一人で行くにあてがあり　緑雨
暗闇にクリームの香にほつて來　静太
魂のもう暗闇になつて消へ　鮎美
暗闇の中で聲なく立つてゐる　晴夫
暗闇で銅貨の秋振つてみる　同
暗闇を主人の音と知つた犬　山雨樓
失業の日から暗闇なつかしく　同

華水居鼎坐吟（神戸）

十月五日夜　西村明珠報

箸、蒟蒻、滑稽句

蒟蒻のからしがきいて上機嫌　華水
箸ぼんと割つてうれしい人と食ひ　明珠
びつこの子道草食ふてゐてもよし　同
ルンペンは丼飯へ箸を折り　春秋
無遠慮な箸をマダムはジロリ見る　同
こんにやくの様な男に戀があり　同

天王寺支部例會（大阪）

川柳雑誌社

十月九日　於内藤製作所　須崎豆秋報

スキ焼　互選

湯上りのすぐすき焼の座に呼ばれ　鮎美
いろは出て足元寒く別れたり　豆秋
すき焼が匂ひお父さんは歸へ頃　緑雨
すき焼に箸と箸とがおなじ肉　同

スキ焼へ少し儲けた氣焔なり　琴人
酒癖の悪るいスキ焼ほつとかれ　同
スキ焼の石油コンロ消えかゝり　水車
すき焼へフト亡き友の事を言ひ　観月
友とのむすき焼戀もなく語り　同

金　観月選

ためてゆる方は默つて笑うのみ　鶴峯
現金を握つて強いことを言ひ　水車
金入れを調べてゐるも母の慈悲　同
金策の世帶の事を明すなり　公二
働いた金を握つてくる夜道　鮎美
いゝ氣嫌金は財布のまゝつかひ　同
（軸）金力に權力におぢぎかりして　観月

窓　鮎美選

泊る氣が窓から外を見る二階　鶴峯
アパートの友訪れて窓に立ち　観月
しめる窓に丸髷は寫つるなり　緑雨
カーテンを重く明ければ光る窓　琴人
病院の窓から白いものが垂れ　豆秋
大阪の灯が遠ざかる船の窓　同
（軸）欠勤の窓にさびしき陽があたり　鮎美

満洲　緑雨選

満洲で十年振の友に逢ひ　海洋人
満洲から歸つた入墨强請りに來　柳村
満洲も小唄で間ければいゝ所　水車
恵まれぬ身を満洲の陽にさらし　公二
満洲の友を案じて湯につかり　鮎美
満洲の話馬賊の唄になり　同
偵察機満洲の野へ翼を張り　琴人
高粱のかげで支那兵ふるへてゐ　同
（佳）満洲も知つてる女三味をひき　柳村
（佳）満洲の記事へ眼鏡をかけし母　観月
（佳）髭のびたまゝ満洲へゆく氣也　鮎美
（佳）満洲で馬賊になつた噂なり　公二
（佳）満洲で女はすさびきつてゐる　同

近視眼　琴人選

近視眼その上頭も下げてゐる　海洋人
飛行機の音だけきいた近視眼　公二
近視眼兒のいたづらに微笑みぬ　観月
近視眼女給のエロも見つからず　鮎美
近視眼あれが見えるかとためまれる　緑雨
近視眼友憂鬱な事を言ひ　柳民
近眼へ下駄を揃へてにくまれる　柳村
度の强い奴を掛けてる救世軍　同
（佳）近眼をとると優さしい父の顔　水車
（佳）近視眼はづして笑ふ久しぶり　公二
（佳）近視眼紅茶に湯氣を立てゐる　観月
（佳）近視眼ひゞりになつたうらゝかさ　鮎美
（軸）マヽまんと言はせ近眼かけてゐる　琴人

川柳雑誌社神戸支部部友句會（神戸）

九月二十九日　於華水居　西村明珠報

席題　敬禮　互選

泣いた子へ敬禮をして見せてやり　繁堂
敬禮の目に口ひげが動いてる　鬼笑太
敬禮へ聯隊長のプロフィル　春秋
最敬禮たゞ旗だけが風になり　華水
敬禮をしておいたのに叱かられた　明珠

席題　内氣　明珠選

窓に立つ内氣重たい息をはき　鬼笑太
長男の内氣へ妹ませてゐる　笹舟
妥協した型で内氣が坐つてる　華水

内氣今日家賃値下げの判を押し　主税
(人)相談へ内氣いはんとしていはれ　春秋
(地)内氣ですあそこで本を讀んでます　鬼笑太
(天)一人兒せめて内氣を直したし　繁堂
(軸)内氣な子母が笑らへば笑ふ丈け　明珠
席題　褒める　主税　選
ほめられてゐるのを養子知ってゐる　春秋
先生に褒められた子が一人ぼち　明珠
豆細工女中もうばも褒めてゐる　笠舟
(人)褒められて子供の用事一つふた　竹風
(地)貰ひ風呂出てから褒める湯の加減　華水
(天)説諭して君にもほめるさがある　鬼笑太
(軸)未亡人ほめられてゐる髪の艶　主税
席題　半分　春秋　選
子の使ひ半分きいて飛んで行き　竹風
(佳)腰こしらで半分食べる林檎持ち　鬼笑太
(佳)半分も知らぬ男がよく喋べり　華水
(佳)急用へ半分刈ったとこである　同
(軸)半分へ次男は異議を申し立て　春秋
席題　舌　華水　選
待ちわびた小さな舌へ乳房が來　笠舟
舌の根のかはかぬうちを意見され　明珠
嘘ついた舌へカクテル甘いなり　春秋
(人)疲れてる父へもった舌で來る　竹風
(地)舌出してうまい話にのってゐる　鬼笑太
(天)日向ぼこ足に觸った猫の舌　主税
(軸)口論へ舌の長さを考へず　華水

綠雨居偶會（大阪）

橋本綠雨報

十月七日
當夜は風雨だから唯も出席者がないと思ってたら鮎美君が來る、堺市から淋一郎君が來る。

擴張に屋根看板も塗りかへる　鮎美
擴張の空地へ呼んだ花角力　同
擴張へ社員一同氣が揃ひ　淋一郎
擴張をする日故郷の空の色　同
擴張に勝手の違ふ店になり　綠雨
擴張のために出張ばかりする　同

川柳雜誌社籔川支部

大地吟社十月例會（島根）

十月十日夜於第十四區クラブ　伊藤綠之助

兼題　働　綠之助　選
働けば秋は飽くまで朗らかな　琴朗
働いて食ふばつかりが百姓か　幽明改め傳重
一日を働き了へて子をあやし　田鶴緒
働かしてくれ喰はしてくれのルンペン　松操
働いて〳〵嫁となりにけり　華村
人波へ眼を働かせ刑事ゐる　二三麿
鍬輕々来の値などに拘はらず　春歩
(秀)事々に職業意識働かせ　鴉天
(秀)背景がよく働いて彼の位置　同
(秀)働きに出る子に見てやる空模様　琴朗
(秀)默々と働く男妻は病み　春歩
席題　眼　二三麿　選
誘惑か眞實の戀かあの眸　鴉天
その明眸依然と殘り寫眞帖　綠之助
宵の街人目憚る連れが出來　琴朗
演壇へ初めて立つた眼のやり場　同
眼をうつせば死をまざらす蟹が　麁亟改め羅門
(人)麗人の眸冷たくうるんでる　鴉天
(地)その奥に何があらう眼の清さ　傳重
(天)啼めた眸にうつる星の色　綠之助
釘　琴朗　選
妻の高さへ釘を打つ臺所　二三麿
零落れて下駄まで釘が尖ってる　羅門
慘劇の家釘づけにされたまゝ　鴉天
見習ひの今日はこつ〳〵伸ばす釘　綠之助
釘拔きに祖母の力は足らぬなり　同
(人)大工の口は今釘が一ぱいだ　二三麿
(地)ひれくれた姿で釘が落ちてゐる　羅門
(天)からかふやうに二度目の釘も曲り　二三麿
陽氣　鴉天　選
近所から可愛がられる陽氣な子　二三麿
引き立てる樣に陽氣になれといふ　琴朗
一日は陽氣で暮らしてみたい俺　華村
十八で陽氣な生活消えゆきぬ　同
呑めば直ぐやはり陽氣にしてくれる　綠之助
笑ひ聲秋はカラリと晴れてゐる　羅門
(人)陽氣にすれどやっぱり苦しい俺　二三麿
(地)病院へ陽氣な友の訪れて　同
(天)陽氣な心かきみだして幻の　羅門
底　羅門　選
心の底にまだ彼女がゐる　春歩
瓶の底に悲劇を生んだ殘り毒　綠之助
女給　互　選
美麗なる女給にも慘めな日が多し　華村
みんな戀人のやうに女給振舞ひ　二三麿
女給もう女給の唄に飽いてゐる　春歩
誘惑へ女給の瞳澄んでゐる　琴朗
頰杖に暇な女給の物思ひ　鴉天

技巧のこぼるゝ女給の鹵莽から　羅門
病床の女給へ變る〳〵客　綠之助
問題の女給噂に似ずやさし　同

川柳雜誌社 御旅支部會報（大阪）

生田翠夢報

月、迷惑、スリッパ　路郎選
迷惑でござんせうけど酒の上　あや美
夜が更ける迷惑そうに眠むそうに　同
惚れきつて迷惑なんど考へず　みつる
結局は女中飛ばしり受けてゐる　翠夢
月の冴え女默つて見てるのみ　みつる
一人居りや月は益々冴へるなり　あや美
お月様歸る彼女へ照つて呉れ　同
失戀は月の出潮に泣くもよし　翠夢
羨なく親子のスリッパ並んだり　同

奉天川柳會　八月例會

八月五日午後七時　淀町蓮華寺に於て
滿洲　岩崎柳路報

常に料亭カフエー等でやつて居た例會を今度は鈍電灯光りを送る蓮華寺を會場とした。當地は水期と稱し十一月から翌年四月までは寒氣の爲め室内に押込められ仕事の出來ない國故半年の内に一年分を働かればならぬ、目下の滿洲人は忙がしい半年は晝、半年は夜ォーロラに因て僅に夜の半年に光を得る、北極に近いだけ一年を仕事と休みとで區切つてるのも面白い。

今度私が奉天から旅行に出るので、登美坊氏の發議で席題を「左樣なら」と課せられ、一同作句午後十二時前散會した。尚今度の句會には新らしい川柳家が數名列席された事も嬉しい、解散後料亭更科に於て連樂、福來、笑鬼、白洋、新朗、保月、六角、筑水、登美坊諸氏より、送別の宴に招かれ席上にて相模吟等發表、川柳談に盃を交し午前二時宴を終つた。

宿題　寢　卷　加藤笑鬼選

蚊張をつる寢卷の窓へいゝ月夜　詩蘭
一日の汗を流して寢卷なり　十車
專用の寢卷まである仲となり　才坊
駈つけた寢卷寢卷の火事見舞　柳如
うつり香の寢卷淋しい朝の雨　みづかつ
うたた寢にソツト寢卷の心やり　重世
廐雀へ寢卷の客が二人見へ　保月
寢卷とも言へぬ藝者の長襦袢　柳路
（人）寢卷着て落ち着いてる原稿紙　思水
（地）折詰へ寢卷の集ふ子澤山　柳路
（天）寢卷着て女まだ〳〵用があり　六角
（軸）客の名を聞て寢卷のまで合ひ

宿題　西　瓜　池田新朗選

冷へてゐる西瓜へ晝寢起される　雨明
まけつぶり西瓜の中味かんがへる　才坊
西瓜喰ふ舞妓の口の小さすぎ　思水
歸る子を待つてる井戸の西瓜冷え　重世
ニーヤーの西瓜を圍むアッパッパ　連樂
裏町を賑わしてゐる西瓜賣り　筑水
炎天へ冷へた西瓜で息を入れ　與太助
風呂敷をとけば西瓜と母の文　保月
滿員車土產の西瓜邪魔になり　松代
冷藏庫中に西瓜は場所を取り　柳路
西瓜屋は中味知つてる樣に言ひ　六角
高利貸出した西瓜へ手も觸れず　白洋
切り賣の西瓜へ黑い苦力の手　福來
叩いては又叩かれて西瓜賣れ　柳如
（人）岐阜提燈の下へ西瓜は運ばれる　柳路
（地）西瓜賣り二つ竝べて値切られる　深太樓
（天）西瓜割る母を取りまき子は達者　柳如
（軸）減俸に西瓜の種も癪になり　手島福來選

宿題　黑　子

金持になれる黑子を大事がり　十車
黑子から誘拐犯の足がつき　柳風
警察へ顏の黑子も書いて來る　連樂
つき衿が黑子を一つ見せて居る　詩蘭
劍難の相と云はれて取る黑子　寒樓
寫眞屋は無斷で黑子消して置き　六角
辻易者黑子へ運の好い話　思水
添ふてから變な所に見る黑子　柳路
書き黑子昨日はあそこ今日はこゝ　登美坊
十年目見覺えのある娘の黑子　白洋
（秀）よいと云ふ黑子を持つ不仕合せ　柳如
笑ふ時黑子をかくす癖があり　筑水
青春の少し氣になる泣き黑子　深太樓
いゝ黑子四十を越しても唯の人　同
參政權黑子の女よく喋べり　柳路
（人）年頃の黑子に惱む壜の數　連樂
（地）涼臺話す黑子の毛がゆれる　登美坊
（天）容貌を黑子でなやむ十八九　思水
（軸）叱られて黑子をなでる癖を持ち
（軸）入黑子易者眞顏で褒めて居り

宿題　雲　野並白洋選

雲ばかり眺めて暮し失業者　薫
涼み臺雲の早さへ殘る月　連樂

十字路へ雨を湛へて雲は晴れ　自由詩蘭
警報にそむいた雲が今日も出た　十車
曇日の續いて遊び事に馴れ　思水
青雲の望み空しく病み續け　深太樓
黒雲のたれて燕は底を飛び　松代
雲行を案じて父は旅に立ち　柳路
神棚の天井へ貼る雲一字　みつ子
綿雲のハッキリ寫る水溜り　登美坊
青雲を夢に午睡の顔の蠅　福來
薄雲が晴れて涼しい天の川　才坊
(人)雲がくれ救世軍へすがりつき　深太樓
(人)雲月をまねて寄宿舍叱られる　柳風
(地)雲水の立小便や町はづれ　柳如
(天)雨雲に客座をはづす菊作り　柳如
(軸)夕燒けの雲へ釜は鎌を磨ぎ
(軸)排貨から風雲急ならしい記事　保積柳如選

席題　團扇

御上人扇ぐ團扇にある睡氣　登美坊
七輪の團扇音ほどきいて居ず　筑水
お說教團扇でかくす生あくび　白洋
緣談へ母は團扇を太ふ振り　同
(人)たしなみの女團扇が口へ來る　連樂
(地)旦那さんになれば團扇に取られ　保月
(天)豆團扇母燈明を消しに立ち　柳路
(軸)團扇の手ハタト止だ。王手飛車　立井登美坊選

席題　左樣なら

左樣ならまだ立つてゐる妻の母　新朗
左樣なら二度させて立つ母親　柳如
ドラの音涙浮かべて左樣なら　深太樓
一聲の汽笛に繼く左樣ならとしかづ
左樣ならそれでも獄舍ふりかへり　六角
左樣ならハッキリ廊の朝を知り　同
(佳)君と僕バーの表で左樣なら　柳路
(同)落籍されて俥で廻る左樣なら　同
(同)左樣なら車掌右手を高く擧げ　福來
(人)張りきったテープに殘る左樣ならとしかづ
(地)幼稚園道まで續く左樣なら　柳如
(天)退院のさもほがらかな左樣ならとしかづ
(軸)投キッス笑をたゝへて幕に消え

川柳雜誌社高知支部

九月例會（高知）

九月二十五日　於祿々庵　中澤濁水報

兼題　無沙汰

無沙汰者來てたゞならぬ空氣なり　魚川
榮轉の讃へた國へそれつきり　文月
好い便り添へて無沙汰を詫びて來る　同
貪乏に馴れて無沙汰も平氣でゐ　トモエ
勝手からも御無沙汰を詫び皿の音　濁水
坊ちやんを抱いて無沙汰は重たがる　紫白
双方の無事へ無沙汰がつゞけられ　同

席題　自轉車

グロリヤを空廻ひさせてラブシーン　春風
雨の日の自轉車庭へ巾をとり　柳風
始末書を入れて自轉車署から受け　同
自轉車のパンクへぽつり〳〵雨　悠羊
電報夫玄關にまで乘りつける　青果
電報の自轉車人をハッとさせ　紫白

延期

大もめで延期幹事はほっとする　トモエ
男の子生れ出發延期する　濁水
渴望のファンへ憎い雨で延び　青水
借金の延期尤もらしい嘘　柳風
締切りを十日延ばした義損金　悠羊
信用にかゝると延期責められる　紫白
會場の飾そのまゝ延期なり　春風

冥土

極樂へまでの迷路を往き戻り　芽柳
冥土からやつと戻つた寢汗なり　春風
極樂のさすが冥加な顏ばかり　濁水
赤鬼へ頻りに輕む妖婦の瞳　柳風
惡黨は閻魔の下でひざまづき　春水
(佳)一句出來賽の河原の砂へ書き　悠羊
(同)住みよいと見て此世へ戻り來ず　魚川
(同)今死んで來た淨土で嬉しがり　春水
(同)拷問で閻魔は生きる目に遇はせ　紫白

川柳雜誌社籏川支部

川柳大地吟社々報（島根）

伊藤緣之助報

九月二十二日

初代川柳忌は二十三日であるべきだが、都合に依り二十二日夜これをいとなむことにした。

莊原番傘の主將美綱さん來會され、雷相さんが久方の出席で盛大な一夜であつたことはいふまでもない。時あだかも上弦の月皎々として座敷にしのび秋冷ひし〳〵と身をかこむ、私は席上初代川柳の略傳と初代川柳忌に因みし意圖を話し、私の川柳觀と今後の進路に就いて卑見を述べた。時間を割いて句境にひたり、後美綱さんの漫談……げに無人の野をかけるに似て、爆笑しばし止まず、愉快な閉會時刻に達した。當夜の句艸左の如し

兼題　秋の雨　緣之助選

蜘蛛の巢をくぐつて秋の小さい雨　美細

久米正雄れころんで讀む秋の雨　春歩
面白く雨受流す芋の葉よ　琴朗
一夜の雨が虫の音を失くした　紫光
(人)稔着てわびしき心雨となり　田鶴緒
(地)初めての稔重たく雨にあひ　二三磨
(天)秋の雨眉引き直す氣も出ず　雷相
(軸)秋の雨柘榴の朱をなつかしみ

席題　肩　雷相選

大寫し女優は肩で泣いてゐる　琴朗
單衣なる女給の肩の曲線美　田鶴緒
抱いた子の肩越しに見る母の顔　二三磨
肩をすべつた情痴に狂ふ手　麗亟
秋風に乞食の肩が光つてる　同
(人)半圓を描き花の衿肩を代へ　紫光
(地)人の波泳ぐ型の肩車　美綱
(天)肩上のとれた着物が着むづかし　紫光

席題　馬　美綱選

馬小屋へ幸福な朝を起きて來る　麗亟
霜の朝どこから來たか馬の息　華村
道草を食つてる馬に衿が出來る　綠之助
馴れた手で叩けば馬のうなだれて　雷相
(人)サーカスの馬の小さく眼ひらき　同
(地)行き着いた馬そのまゝコップ酒　二三磨
(天)馬車馬のたゞ忍從の首を垂れ　琴朗

九月例會（島根）

兼題　虫　綠之助選

虫籠の虫に今宵の灯を細め　華村
虫の聲ピタリと止んで人の影　二三磨
萩、芒、桔梗の露に虫は鳴き　田鶴緒
虫、虫、虫秋を告げるに忙しく　琴朗
冷靜になつて虫の音きいてゐる　枯楓
虫よ泣け泣け夜汽車も去つた　鐵漿
重れ着をして虫の音きゝに來る　雷相
(人)秋の憂愁を虫の聲がする　幽明
(地)病室へ飛んだ虫けらそれも秋　枯楓
(天)一人寢の寢返りてば夜半の虫　田鶴緒

席題　夢　二三磨琴朗選

死んだ子に呼ばれて母は眼をさまし　田鶴緒
夢さむれば職を探さにやならぬ俺　春歩
夢よ〜現實であつてくれ　紫光
あの夢の連想を追ひ洗面器　枯楓
よき夢にいそ〜朝を出る稼ぎ　綠之助

波　柳光子枯楓共選

波へ大きくぶつかつて嬉しい日　鐵漿
情死する二人に波の靜かなり　春歩
小池の一つ〜へ陽がおぢり　枯楓
港の灯近く波を蹴り波を割り　綠之助

秋立つ　紫光麗亟共選

やるせない病臥のまゝに秋となり　枯楓
秋になれば病が癒ゆると言つた切り　鐵漿
アンテナがそゝりて高し秋立てば　綠之助

靴　綠之助選

亡き父の靴がこれから俺の物　柳光子
夫婦して靴をはかせる宮詣り　紫光
靴の音一度にひゝく廻れ右　枯楓
馘の豫感に急ぐ靴先　麗亟

明珠居小集（神戸）

十月十四日　西村明珠報

兼題　豫告　華水選

改築の豫告ハツキリ移轉先　繁堂
樂屋から出れば豫告のビラがあり　竹風
當選の豫告に髭を剃つてゐる　秋彦
豫告なく故郷へ歸れば母ひとり　主税
增刊へ豫告の頁エロを見せ　鬼笑太
(人)雨雲になつて豫告へ加筆する　寄舟
(地)ハツキリといふ會費で豫告來る　同
(天)豫告ビラ着たばかりの旅役者　竹風
(軸)東西屋豫告の太鼓ひどくうち　華水

席題　本店　主税選

本店をしつかり握る鍵一つ　華水
流行の渦に本店つゝまれる　明珠
(客)本店は美人揃ひの名で賣れる　鬼笑太
(客)本店にゐて席順をあきらめる　春秋
(人)本店で小僧時代を笑らはれる　繁堂
(地)本店は大天井に扇風機　春秋
(天)本店のマダム小供が無いのなり　秋彦
(軸)挨拶に行く本店の長廊下　主税

席題　糊　鬼笑太選

糊をした手紙へ爲替忘れてる　秋彦
歸省して糊の蒲團へ寒う寢る　主税
糊ぬけた着物で養子膳につき　華水
糊つけたとこへ子供がよごして來　明珠
內職の指に糊の冷えが知れ　竹風
(人)胃袋の樣に盥の糊袋　春秋
(地)糊買は鍋へ銅貨の音をさせ　竹風
(天)糊刷毛を父がつかへば毛がぬける　明珠

本社基金醵金者御芳名

（受付順）

醵金を拜受しました方々の御芳名を錄し御厚志の程を深謝致します。

金五圓也　福田山雨樓殿
金壹圓也　水谷鮎美殿
金壹圓也　竹内機兒女殿
金壹圓也　朝田スエノ殿
小計　八圓也
累計　三百二十九圓十六錢也

社告

本社基金募集

【川柳雜誌】が柳壇の力強い存在として創刊以來八星霜に亘り獨立自營、孜々として其標榜たる川柳の社會進出、質的向上、量的發展の大旆を揭げつゝ力一ぱいに奮鬪して來ましたことは諸君の夙に御承知の事と存じます。これと申しますのも、わが社の主義主張に贊同され、直接間接、大なる御聲援と御助勢を頂きました皆樣御愛護の賜と深く感謝してゐる次第であります。今や多幸なるべき辛未柳壇を迎へ、つら〳〵過去現在の實績を顧み、更に將來を深思しますときに、本誌の使命の益々重大なる事を自覺する次第であります。しかしながら如何に絶大なる熱に燃えつゝあるとは云ひましても物質上に惠まるゝことの薄い同人社友の意氣だけでは到底充分なる躍進的効果を擧げることは容易ならぬことゝ存じますごうしても川柳に熱を持たれ【川柳雜誌】を愛して下さる諸君の御力添へを仰いで時勢のテンポに副ふべく現在の狀態よりも、より以上に積極的な畫策の實現に努めなければならぬことを痛感するのであります。

就きましては去る一月十四日の社友同人會の席上充分審議を重ねました結果、左記規定に依りまして各位に淨財の御喜捨を願ふことゝ致しました。何卒本社の微意のあるところを諒とせられ本社關係の方々は勿論、大方の各位に於かれましては本計畫の爲め奮つて御申込あらんことを祈ります。

昭和六年二月

川柳雜誌社

規

○一口一圓以上とし幾口にても御申込願ひたく、一口以上であれば端數がついても結構です。この意味は全くの淨財の喜捨を仰ぎたいからです。

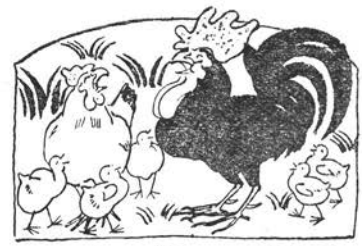
○御送金は大阪市住吉區平野西之町八三川柳雜誌社事務所内、基金募集係宛になるべく（振替大阪七五〇五〇）か爲替でお願ひ致します。

○〆切期日は別段定めませぬがなるべく本年中に一先づ打切りたいと思ひます。

○御芳名は誌上に錄し領收の證と致します。

○基金として拜受いたしました分を誌代に振替へ又は誌代を基金に振替へる等のことは御用捨願ひます。

○御喜捨は現在の社の經常費に充つるものではありません。將來への堅實さを保證せしむるためのものでありますから、その點御含み願ひます。



編輯の窓

生郎路

▼夜長になつた。句を作るにも文を練るにも多くの時間を持つことが出來るので働かれば食へぬ詩人にとつてはありがたい季節である。その代りそろ〳〵寒くなつた。

▼本號はいつもより、編輯が遲れたところへ、私が松茸狩に參加したり一寸した旅に出たりしたので、發行がいつもより遲れた。編輯や校正に努力してくれてゐる人たちにまで迷惑をかけてすまないと思つてゐる。

▼本號の表紙は大西長三郎氏を煩はした。これは同氏の自畫自刻であるが、自畫自刻と云へば本誌創刊當時柴谷柴舟氏を煩はした表紙もそれであつた。そぞろにそのころが偲ばれる。

▼本號の「西之町」で發表されてゐるやうに本誌に據つて、活躍を期すべく新進氣鋭の柳友が續々と入社されたことは、川柳のために大きなよろこびである

▼松江の支部は一時閉鎖の止むなき狀態になつてゐたが、久方墓秋君が新に奮起して、その再興を謀り同士等と共に松江支部のために闘つてくれることになつた。同地方の柳友諸君の應援を墓秋君に代つてお願して置く

▼各地支部だよりと云つたものを掲げて支部との連絡をはかりたいと思ふ。奮つて稿を寄せられたい。かくして編輯の上にも新味を加えて行きたい。

▼藤里好古氏の「川柳日待及び月待」は本號で完結した。同氏の研究が次から次へと深さを加えて行くことをよろこんでゐる

▼「地下鐵」は原稿が段々振はなくなつたやうな氣がする。中には面白いものもあるが、何分場所が場所だけに筆者には氣の毒である。それで次號あたりから何んとか改革をしてウンと興味のある讀物を聚めたいと思つてゐる。替ての「ビルディング」で雄飛した人々はこの際腕に撚りをかけてもらひたい。

▼十月八日の夜、里十九居で月評會を開いた。前月欠席した杏三君が眞ッ先に頭を出して勉强振りを見せたそうだが私は突然差支が出來たので欠席した。上京中の紋太氏は此の夜の會合のためにわざ〳〵「燕」で歸り、旅裝のまゝで出席されたそうである。萬障繰合はせた方も、こゝまで來ると、いづれもさまタザ〳〵である。ひろし、琴人、素人、山雨樓、町二君等が例によつて集つた。

▼十一月十八日に社の松茸狩があつた。場所は例の鳥取の莊である。近來俗務に忙殺されてゐる私は斯うした集りにはなるべく遠慮する方針をとつてゐるが神戸から紋太氏が參加してくれることになつてゐたので私も顔を出すことにした。ところが紋太氏の顔が見えぬので一寸淋びしかつた。山でゆつくり川柳の話をするつもりが、すつかりあてが外づれた。

そこで萬よし老と二人で、チビリ〳〵やりながら、政談をほしいまゝにした。空は澄んでゐるし、彼一語 我一語 で松茸のことなどは、すつかり忘れてゐた。この日の記事は亂耽君が背負ひ込んで呉れたからその方に讓る。

▼十月二十四日の午後四時から阪大川柳會に出席した。例によつて兼題「友」の披講後、席上吟「弱點」を課した。兼題よりも席題に佳句があつた。七時半散會

▼「奈良文化」の主宰辰巳利文氏

に招かれ同夜八時二分前大軌發山田行急行で畝傍に向つた。高田で乘換橿原神宮前に下車した驛前で月を背にして來る安江不空氏に會つた。その後方に辰巳利文氏が續く。辰巳氏とは初對面であるが同氏の令弟故蘿楓君が「川柳雜誌」によつてその作品を發表してゐた關係から弟思ひの利文氏と文通による交りを結んで來たが蘿楓君の死後落成された蘿楓居へ招かるまゝに訪れたのであつた。安江不空氏とは實に長い交友であるが、數ヶ月前南海電車中で會つたきり會はなかつたのである。安江氏辰巳氏共に歌人である。

翌廿五日の午前十一時過ぎ綠雨君が來畝した。そこで四人と辰巳氏の甥兩君の六人で飛鳥巡りをやつた。「大和萬葉古蹟巡禮」の著者辰巳氏の案内で日本文化の發祥地の土を踏んだ譯である畝傍の一夜、飛鳥の一日は近ごろの私にとつて實に愉快な旅路であつた。

▼最近、撫順に落ちついた柳路君のために早速蛇皮線社の人々

懸賞川柳募集

題「結婚」

十一月十日締切

その他雜吟を募る

▼用紙　官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）

▼賞品　秀逸數句薄謝を呈す

▼投吟　大阪市西成區千本通五丁目七　麻生路郎氏宛

化粧新聞社

が歡迎句會を開いて下さつたそうである。當の柳路君の喜びは云ふまでもないが、自分としても大きな喜びを感ずる。

畫の校正

山雨樓

▼校正はいつも晩から夜にかけてやつて來たのであるが今日（三十日）たまに晝ひなか藤本へ來て校正の目を光らせた。尤も綠雨兄は晝夜に拘はらずやつて來られたのであるが、自分は勤務の都合でそれが出來ないので今日のやうなことはまことに珍らしい。

▼それでも事務と云ふものに馴れた僕には、一寸でも校正の手が途切れると云ふことは何だか淋しい。ペンを持つ忙がしさが懷しくなつて來る。背を撫でゝ吳れる太陽に對して、じつとしてゐるのはほんとに相濟まぬと僕のささやかな責任感が背をつゝく。

▼今日の校正で一番大きな微苦笑は、明石蛸壺川柳社の觀菊川柳會案内記事中、會費のところを金五拾圓と校正刷。僕は、かほるさんに見て頂く爲めに之に朱を入れたくなかつたのでした

▼昨夜は十時頃迄綠雨兄と二人で校正をやつた。各地柳壇のところは僕が讀んで兄に見て貰ふざつと九百句を讀んだが舌がもつれて困つた。この間兄からたつた一言「代りまよか」

▼何の九百句千句に參る我輩ではないのだが、その前夜も前々夜も、川柳に關したことで二時近くまで夜を更かしたので、聊かねむたうなつてゐたのでした

▲綠雨兄も昨日は珍らしく制服で校正に來られた。——僕は年中制服だが——何んでも昨日は勤務明けの朝家へ歸らず、直ぐに雜誌の仕事の爲めに、校正の爲めにずつと夜迄働いて下すつたのです。昨夜十時頃、印刷工場の人、居殘りから歸りがけに「えらいしつぽりだんな」綠「ほんまに、うちは年日の朝六時に家を出たつきりなつせ」

▼校正室の隣の机に「新農業新聞社」の方がやつてゐられる。その中の「久城公平」といふ方。といきなり友達になる。同氏は冠句を永らくやつてゐられる由しかも新傾向の冠句を。句も見せて貰つたがとても新らしい。川柳に付ても深い理解と關心とを持つてゐられる嬉しく思つた

▼今日は綠雨兄は勤務、校正の結果を戀人のやうに待つてゐられる。一日も早く雜誌を生み出したい情熱が此處まで電波してくる。僕には感じられる。舞臺の裏で觀衆の待ちあぐんだ顏を豫想しながら、せつせと働いてゐる道具方を思はせる校正ではある。

投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▼「第一線」への投稿は社友、同人及推薦作家に限る。

▼春秋點及近作柳樽は一般作家（第一線の推薦作家を除く）の欄とす、但し同一人にて兩欄への投句は遠慮されたし。

▼光耀抄は女性作家に限る。

▼春秋點、近作柳樽及光耀抄の作家中優秀なる作家を第一線欄へ推薦するものとす。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第九卷第一號課題

十一月五日締切

（各題十句以内）

▼近作柳樽　安井ひろし選

▼家庭　前田雀郎選

▼微笑　住田乱耽　伊藤綠之助　共選

第九卷第二號課題

十二月五日締切

（各題十句以内）

▼近作柳樽　松丘町二選

▼婚　麻生葭乃選

▼沈默　中澤濁水選

毎號募集

▼春秋點　麻生路郎選（五句以内）

▼光耀抄　麻生葭乃選（無制限）

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

一部　金參拾錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

（半ヶ年分以上御送金の方には投句用箋を贈呈致します）

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも貰ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は會新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和六年十月廿五日印刷

昭和六年十一月一日發行

第八卷第十一號

（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　麻生幸一郎

發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社

振替口座大阪三一五一四番

電話天下茶屋二五七九番

大阪市住吉區平野西之町八三番地

事務所　川柳雜誌社

振替大阪七五〇五〇番

電話天王寺一一六七番

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

賣捌書店

（大阪）大賣捌　二盛社書店。（明文堂　其他　市内　各書店）

（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、後藤、寶文館（函館）

石塚（京都）三宅（松山）弘文舍（石川縣）マコトヤ

川柳雜誌社關係の人々

（順はいろいろ）

賛助員

大池澤樂居　川上三太郎
道弘雄米村あん馬　川村花菱
吉岡烏平石川双葉子　池田雪峰
岡本一平吉田清西田艸樂　村松夢裡
片岡直方田村孝之介西村山月山本雨迷　三輪夏曉
嘉納純二窪田銀波樓西村明珠山本丹路姫田夕鐘　中島歳洲
田中辰二安川久流美　生田翠夢
長崎柳秀前田雀郎川村觀月熊谷紅久方變人　中見光路
國枝史郎前田五健片桐靈童福田鶴峰須崎豆秋　水田光穂
藤村作柴谷柴舟吉田水車柳川洲馬日野華水橋本綠雨　竹内多聞
藤本卯之助篠原春雨立井登美坊楊井二南水柳路安西杏三　同人
赤井清司蛭子省二辻左馬越田一杉岩崎柳路福田山雨樓　松丘町二松盛琴人
淺田一末弘嚴太郎森東魚永田里十九阿形伊愚陀麻生葭乃　編輯局（同人）
相元紋太　中川めかく子阿部閑生伊藤愚徹　住田亂耽
永川秋月櫻井圓角長谷川一陽太田朝陽主幹　萬よし庄

社友

伊藤彦造　岩垣奇可愛
大島濤明　茨木奈緒美
岡田三面子　伊藤線之助
中澤濁水　中野裸人
木村晃卓　高橋かほる
麻生路郎

客員

道頓堀支部（大阪市）幹事庄　万よし
天滿支部（大阪市）幹事北山　悟郎
濱寺支部（大阪府）幹事太田　朝陽
神戸支部（神戸市）幹事日野　華水
山口支部（山口縣）幹事柳川　洲馬
函館支部（函館市）幹事龜井　花童子
高知支部（高知市）幹事中澤　濁水
梅田支部（大阪市）幹事川村　觀月
螢ヶ池支部（大阪府）幹事茨木　奈緒美
金澤支部（金澤市）幹事中川めかく子
田邊支部（和歌山）幹事辻　左馬
箕川支部（島根縣）幹事伊藤　綠之助
豊橋支部（愛知縣）幹事白井　梅里
平塚支部（神奈川）幹事酒井　駒人
加古川支部（兵庫縣）幹事水田　光穂
京都支部（京都市）幹事桑原　京郎
鳥取支部（鳥取市）幹事中島　鐵洲
別府支部（別府市）幹事木村　晃卓
堺支部（堺市）幹事友淵　貴山
松山支部（松山市）幹事三好　計加
守口支部（大阪府）幹事朝田　新水
御旅支部（大阪市）幹事櫻井　圓角
高岡支部（富山縣）幹事越田　久水
天王寺支部（大阪市）幹事須崎　豆秋
鶴町支部（大阪市）幹事關本　雅幽
小松支部（石川縣）幹事上野　錦水
御池橋支部（大阪市）幹事村松　夢裡
松江支部（松江市）幹事久方　慕秋

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二一番

本社の特典

▼「川柳雜誌」は愛讀者のものです、振替用紙で御送金の場合には郵便局に拂込む手數料を本社で負擔致します。振替は確實で送金と通信ができます。

▼誌代半ヶ年分以上御送金の方には本社規程の投句用箋を贈呈致します。

本社例會

日時　十一月六日午後六時半
會場　大阪市南區清水町市電停留場西入北側　端の坊
兼題　「幸福」　三句　路郎選
會費　金二拾錢

社告

本社の例會案内希望の方は左記へお知らせをお願ひます。

大阪市天王寺區北河堀町三
會報係　福田鶴峰宛

綠雨居小集會

十一月八日午後七時より
兼題「池」
會費　不要

本社事務所にある他の柳誌を見ながら語りませう。別に案内狀は出しませぬから御遠慮なくお越し下さい。（綠雨）

場所は住吉區平野西之町八三（市バス平野線クマタ停留所下車東南約四丁　市設住宅）

大阪時事新報「川柳」募集

手帳「十句」　十一月十日締切　閑生選

燈火「十句」　十一月廿五日締切　閑生選

「用紙はがき」大阪市外豊中町千歳通二丁目阿部閑生宛投句のこと。

◇川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋を左の價格でお頒ち致します。なるべく此用箋を御使用下さい。

五〇枚綴二冊價金拾二錢（送料共）

▼御申込は本社事務所宛。（一錢切手代用不苦）

清酒

白鶴禮讃

白鶴をチントンシャンと提げて來る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
白鶴が縁とはなりぬ君と僕
白鶴に素直な父となつて寢る

摂津灘

嘉納合名會社釀

大阪市西区新町三丁目三番地
昭和六年十一月一日印刷納本
昭和六年十一月一日発行

川柳雑誌（第九十四號）

定價金三拾錢